



SILVA IAPONICARUM 日林

FASC. XI · 第十一号

SPRING · 春

2007

Adam Mickiewicz University
Institute of Oriental Studies, Department of Japanese Studies

Warsaw University
Oriental Institute, Department of Japanese and Korean Studies

Posnaniae, Varsoviae, Kuki MMVII

ISSN 1734-4328

FINANCIALLY SUPPORTED BY THE ADAM MICKIEWICZ UNIVERSITY INSTITUTE OF ORIENTAL STUDIES

Drodzy Czytelnicy.

Witamy w pierwszym zeszycie *Silva Iaponicarum* 日林 w roku 2007. Oprócz kolejnej części tłumaczenia na język polski tekstu autorstwa Nambō Sōkei, przekazujemy do rąk naszych czytelników także kontynuację publikowanego w Zeszycie 8. *Silvy* artykułu dotyczącego kontrastywnego opisu zachowań słuchaczy w konwersacji japońskiej i polskiej.

Bardzo czekamy na zgłoszenia kolejnych artykułów do publikacji.

Do szybkiego zobaczenia w letnim zeszycie *Silvy*.

Kolegium redakcyjne

E-mail: silvajp@amu.edu.pl

Poznań-Warszawa-Kuki, marzec 2007

Dear Readers,

Welcome to the first fascicle of *Silva Iaponicarum* 日林 in 2007. We bring you the next part of Polish translation of the Nambō Sōkei text and a continuation of the paper published in the *Silva* Fascicle 8. on the contrastive analysis of speakers' behavior in Japanese and Polish conversation.

We await new contributions for publication.

See you soon in the summer fascicle of *Silva*.

The editorial board

E-mail: silvajp@amu.edu.pl

Poznań-Warsaw-Kuki, March 2007

読者のみなさまへ

Silva Iaponicarum 日林の 2007 年第一号へようこそ。この度読者のみなさまにお届けするのは、南坊宗啓の著作のポーランド語訳（続編）、そして *Silva 8* 号に掲載した日本語・ポーランド語の会話における聞き手の言語行動の比較分析をめぐる論文の続稿です。

編集委員会は、みなさまのさらなるご投稿を心待ちにしております。

Silva 夏号にてお目にかかる、その遠からぬ日まで。

編集委員会

E-mail: silvajp@amu.edu.pl

2007年3月 ポズナニ・ワルシャワ・久喜

***Silva Iaponicarum* 日林**

Kwartalnik japonsyczny / Quarterly on Japanology / 日本学季刊誌

ISSN 1734-4328

Kolegium redakcyjne / Editorial board / 編集委員会

Uniwersytet im. Adama Mickiewicza,
Instytut Orientalistyczny, Zakład Japonistyki

Adam Mickiewicz University,
Institute of Oriental Studies, Department of Japanese Studies
アダム・ミツケヴィッチ大学、東洋学研究所、日本学専攻

Beata Bochorodycz (ベアタ・ボホロディチ)
Arkadiusz Jabłoński (アルカディウシュ・ヤブオニスキ)
Maciej Kanert (マチェイ・カネルト)
Kōichi Kuyama (久山宏一)

Uniwersytet Warszawski
Instytut Orientalistyczny, Zakład Japonistyki i Koreanistyki
Warsaw University
Oriental Institute, Department of Japanese and Korean Studies
ワルシャワ大学、東洋学研究所、日本・韓国学科

Iwona Kordzińska-Nawrocka (イヴォナ・コルジンスカ・ナブロツカ)
Anna Zalewska (アンナ・ザレフスカ)

Rada naukowa / Research council / 研究顧問会

Prof. Romuald Huszcza, Warsaw University, Jagiellonian University,
Prof. Agnieszka Kozyra, Warsaw University,
Prof. Alfred F. Majewicz, Adam Mickiewicz University,
Prof. Mikołaj Melanowicz, Warsaw University, Jagiellonian University,
Prof. Ewa Pałasz-Rutkowska, Warsaw University.

Silva Iaponicarum
Uniwersytet im. Adama Mickiewicza
Instytut Orientalistyczny
ul. Międzychodzka 5
60-371 Poznań, Poland
E-mail: silvajp@amu.edu.pl
www.silvajp.amu.edu.pl

SILVA IAPONICARUM IS PUBLISHED WITH THE FINANCIAL SUPPORT OF
THE ADAM MICKIEWICZ UNIVERSITY INSTITUTE OF ORIENTAL STUDIES

SPIS TREŚCI / CONTENTS / 目次

中西恭子 聞き手の言語行動に関する日本語会話とポーランド語会話の比較分析（続稿）	11
Nambō Sōkei <i>Nampōroku, czyli Zapiski z południowych stron</i> Rozdział II, CZĘŚĆ 2. tłumaczenie/translation/翻訳 Anna Zalewska	38
STRESZCZENIA / SUMMARIES / 要約	65
AUTORZY / CONTRIBUTORS / 投稿者	69
PRACE NADSYŁANE / FOR CONTRIBUTORS / 投稿	72

聞き手の言語行動に関する日本語会話と ポーランド語会話の比較分析（続稿）

0. はじめに

本稿は、SILVA JAPONICARUM Fasc. VIII, 2006 年夏第 8 号に掲載した、
標題に関する研究報告の続稿である。筆者は、日本語母語話者とポ
ーランド語母語話者の間でコミュニケーション行動にどのような違
いがあるかを見るため、両言語において母語話者同士の音声会話資
料を収集し、文字化した後、〈会話分析〉の手法に従い、主に聞き
手の言語行動に焦点を置いて発話分析を行った。前回は資料と分析
方法について、及びその分析結果の中から、聞き手の言語的反応の
頻度について紹介した。今回は、聞き手の言語的反応の種類におけ
る両言語間での差異、及び話し手と聞き手の話者交替の様相、以上
2 点についての分析結果を紹介し、日本語母語話者とポーランド語
母語話者の、自然会話におけるコミュニケーション行動の違いを総
括する。

1.0 聞き手の言語的反応の種類について

前稿では、日本語母語話者とポーランド語母語話者の自然会話にお
ける聞き手の言語的反応（会話の主流に積極的な影響を与えない、
またはその意図がないと見られる聞き手の発話を指し、日本語では
主に「うん／ああ／そう」など、ポーランド語では主に
「mhm/no/aha」など。）は、日本語会話においては全発話のうち 4
割近く、かなりの割合を占め、会話を構成する重要な役割を果たし
ていること、一方で、ポーランド語母語話者の会話ではそこまで聞
き手の発話が会話の重要な要素とはなっていないという検証結果を
述べた。本稿では、その言語的反応を発話機能から分類した種類に
ついて、またその分布状況、各言語の特徴について取り上げる。

1.1 分布状況の全体像

まず、聞き手の言語的反応はその発話機能から 17 種類に分けられ
る（表 1 を参照）。一般に、発話権を要求しない聞き手の短い発話
はあいづちと呼ばれ、その主たる機能は、〈相手の話を聞いている

ことの表明><理解したということの表明><相手に対する同意や共感の表明><感情の表出>などであり、本研究では表1のB1, B2, B3, B7, B8がこれにあたる。5項目の割合の総数は両言語ともに85%前後であり、差異がない。これにより、聞き手の言語的反応が持つ主な役割と、その聞き手の発話全体に占める割合は、両言語で同じ様相を示しており、この点で言語間の違いはないということが言える。

表1 発話機能別の分類[聞き手のB発話*のみ]

	日本語会話		ポ-ランド語会話	
	発話数	%	発話数	%
B1. 促し	106	3.85%	0	0.00%
B2. 理解・納得表明	1092	39.64%	359	42.38%
B3. 共感・賛同表明	589	21.38%	174	20.54%
B4. 非共感等表明	1	0.04%	11	1.30%
B5. 情報提供等	95	3.45%	25	2.95%
B6. 立場不確定な発話	11	0.40%	4	0.47%
B7. 感情表明	457	16.59%	169	19.95%
B8. 感想表明	91	3.30%	24	2.83%
B9. うち消し	8	0.29%	0	0.00%
B10. 確認	139	5.05%	26	3.07%
B11. くり返し	13	0.47%	5	0.59%
B12. フィラー等	8	0.29%	1	0.12%
B13. 言い換え・総括	31	1.13%	14	1.65%
B14. 先取り	38	1.38%	26	3.07%
B15. 訂正	2	0.07%	2	0.24%
B16. 自己内発話	34	1.23%	1	0.12%
B17. 間もたせ発話	40	1.45%	6	0.71%
合計	2755	100%	847	100%

* 本研究では、会話参加者の発話のうち、会話の実質的な主流を担う、ないしその意図を持つと見られる発話を主ターン発話「A発話」とし、主流に積極的な影響を与えない、またはその意図がないと見られる発話を副ターン発話「B発話」と名付けて分類している。

1.2 発話種類別での相違点

ただし細部を見ると、何点か注目される相違点がある。第一に、ポーランド語会話においてはB 1 発話（促し）が全く観察されなかった。B 1 発話は、「先行する発話内容についてまだ理解は伴わないが、聞き手として注目していることを表示し、話の継続を促す発話」で、話者に対して「話を聞いています」という聞き手からの表明の機能を持つ。日本語会話に現れた実例を以下に挙げる。

例1) 資料日2 (日本語会話第2組)

まり：結構おいしいよね。／ (1.0) あー…／

えみ： うん／ あ、そういえば／ちょっとひとつ

まり： うん／

えみ：聞きたかったんだけど／よりさんは春休みじゃなくて／あのゴールデン

例2) 資料日3 (日本語会話第3組)

さゆり： ああー／ そっかー／ 山？／

よしみ：楽しいと思うけど。／あー大変。／さゆりは？／ 山じゃなくて／

さゆり：うん☆／ ああ、実はね☆／ 違う、

よしみ： テニスやってるじゃん。／ 辞める☆。／

(※スクリプト中の数字はポーズの長さを秒単位で表し、☆は笑いを示す。)

上記の例1は、話に一区切りがついたところで、えみが新しい話題を導入している部分である。下線部でまりが、これからの話題に予測がつかない段階で「うん」とあいづちをうち、発話展開を促している。例2は、よしみの登山サークルでの活動について話していた場面で、よしみの質問はさゆりのサークル活動に関してのものであったが、さゆりはその質問意図がつかめず、依然として話題は

「山」にあると思い、「山？」と確認している。よしみに否定されたことで話題が不明になるが、さゆりは下線部「うん」であいづちをうち、話し手の発話の先を促している。こういった、＜内容理解を伴わない段階で、対話者に話の展開を促す聞き手の言語的反応＞は、日本語会話に特徴的な現象であり、ポーランド語会話においては出現しにくいものであるということが分かる。

第二に注目される点として、逆に日本語会話にはあまり観察されず、ポーランド語会話には比較的出現しやすいと思われる聞き手の言語的反応がある。それは、B 4 発話（非共感等表明）とB 1 4 発話（先取り）である。

まず、B 4 発話とは、「相手の発話内容に対して、非共感・不参同を表明する発話で、ただし、発話権を取るほどの実質的な内容はもたない発話」を指す。以下に、ポーランド語会話に現れた実例を日本語訳とともに挙げる。

例 3) 資料ポ 5 (ポーランド語会話第 5 組)

Alicja : mmm... / (1.5) Nie wiem,
Klaudia : taki klimat tego obrazu, też była zima i tak... /
Alicja : bo ja mi się wydaje, też widziałam jakieś koniki, ale to chyba nie był
Klaudia :
Alicja : Chełmoński, bo czytałam i jakoś mi nie pasował... / Ale już nie pamiętam.
Klaudia : Aha, (*****) /

アリツイア : んー /
クラウドディア : そういう雰囲気があったのよ。冬の景色でなんかこう /
アリツイア : (1.5) どうか。なんか違うと思う。私も馬みたいなのは見た
クラウドディア :
アリツイア : けど、でもヘウモンスキじゃなかったよ。書いてあるの見たけ
クラウドディア :
アリツイア : ど、どうもそんな名前じゃなかったような…。 / でも、もう
クラウドディア : ああ、

例 4) 資料ポ 7 (ポーランド語会話第 7 組)

Teresa : Trochę. /
Maria : teraz mam trochę tego wolnego czasu / i po prostu mogę trochę pomyśleć
Teresa : Tak, pomyśl też czasem nade mną
Maria : nad sobą wiesz, / tam, co mi się tego... /

テレサ : ちよつと。 /
マリア : 今はちよつと、暇な時間があるから / 自分のことについて考える
テレサ : そうよ、たまには私のことも考
マリア : こともできるのよ。何が自分は... /

上記の例 3 は、美術館で見た絵画の作者が誰かについて意見交換をしている場面で、クラウドディアが「あれはヘウモンスキだ」と主張しているのに対し、アリツイアが下線部で「んー」と不参同の気持ちを表現した後、少しポーズを置いて自分の主張を始めている。例 4 では、大学入試に落ちて現在働いているマリアが、「今はちよつと自由な時間があるから」と言った発言に対し、大学の勉強で非常

に忙しいテレサがその「ちょっと」という言葉尻をとらえて、<この私に比べればちょっとじゃないでしょう>という少し批判や皮肉を含めたトーンで同じ語句を繰り返し、相手の発話内容に軽い反発を示している。こういった、話し手の発話内容に非共感・不賛同を表明する聞き手の言語的行動は日本語会話ではほとんど観察されなかった。

B 1 4 発話は、「話し手の発話内容の先を予測し、先取りして補足または完結させる発話」のことであり、次のような例が見られる。

例 5) 資料ポ 3 (ポーランド語会話第 3 組)

Kinga : więc nie chciałam tobie, wiesz, tutaj, ee.../ zaszkodzić” i tak
Dorota : Przeszkodzić./

キングア : だから僕は君を、ええ.../ 傷つけたくなかった
ドロタ : 邪魔したくなかった。/

例 6) 資料ポ 2 (ポーランド語会話第 2 組)

Basia : ehehehehe!/ „O bananach.”☆/
Jola : „Bardzo, bardzo.”☆/ „O czym ty myślisz?”/
Basia : Hahahaha!/
Jola : „Nie powiem ci./ Bo ja chyba myślę o tym samym.”Hahahaha!/
Jola : „Nie powiem ci./ Bo ja chyba myślę o tym samym.”Hahahaha!/
Basia : バナナに

ヨラ : 「すっごくね。」/ 「何考えてるの？」/
バシヤ : ついて。/
ヨラ : 「言わないよ。だって、たぶん君と同じこと考えて

こういった先取りの発話は、迅速な理解力と的確な推察力を要し、単なる短い応答詞での反応よりも高度でかつ積極的な聞き手の会話技術である。親しい友人同士の友好的な雑談会話での先取り発話は、通常は例 5 のように話し手が適当な語句が見つからない時の援助となったり、例 6 のように話の展開に加わり一緒に感情を共有して協調性を見せる、というプラスの働きを持つ。しかし、本来話し手によって話される予定の実質的内容に言及するという意味では話し手の領域に侵入する性格を持ち、その頻度や口調によっては発話権の取得を要求していると受け取られる危険性があり、聞き手の他の言語的反応に比較して話し手の発話権への介入度が最も高い発話と言

える。この項目の比率がポーランド語会話で高いことは、注目しておく必要がある。

1.3 同種類発話内での相違点

次に、同じ機能項目内の発話でのバリエーションの違いについて、聞き手の最も代表的な発話であるB2発話とB3発話を分析した結果を紹介する。

まず、「理解・納得表明」のB2発話について、各言語で観察された表現をグループに分けて一覧にしたものが**表2**である。表中のIは異なり語数、IIは述べ語数を表している。異なり語数とする判断基準は、語句の反復回数の違い（例えば「うん」と「うんうん」）、助詞の付加の違い（例えば「そう」と「そうか」）によるもので、単なる末尾母音の引き伸ばしや促音化によるもの（例えば「そうか」と「そうかあ」や、「そうか」と「そっか」など）は異なり語

表2 <B2発話の種類>

日本語会話				ポーランド語会話			
		I	II			I	II
①	「うん」系の応答詞	12	822	①	mhm系の応答詞	3	188
②	「ああ」系の応答詞	2	105	②	no系の応答詞	3	105
③	「そう」系の応答詞	6	62	③	aha系の応答詞	4	49
④	感嘆系の表現	2	44	④	tak系の応答詞	2	9
⑤	「わかる」系の表現	2	2	⑤	rozumiem	1	0
⑥	副詞系の表現	3	2	⑥	相手の発話の引用	-	0
⑦	相手の発話の引用	-	1	⑦	思い出し理解	-	0
⑧	思い出し理解	-	1	⑧	複数項目の重複	8	8
⑨	複数項目の重複	25	53	計		21	359
計		52	1092				

表3 < B 3 発話の種類 >

日本語会話				ポーランド語会話			
		I	II			I	II
①	「うん」系の 応答詞	5	206	①	no 系の応答詞	3	69
②	「そう」系の 応答詞	14	132	②	tak 系の応答詞	4	29
③	終助詞系の表 現	4	70	③	副詞系の表現	7	17
④	相手の発話の 引用	-	35	④	mhm 系	2	12
⑤	副詞系の表現	6	13	⑤	相手の発話の引用	-	11
⑥	ムード系の表 現	7	13	⑥	ふざけ発話	-	3
⑦	自分に関する 言及	2	7	⑦	ムード系の表現	2	2
⑧	「ああ」系の 応答詞	1	4	⑧	自分に関する言及	1	2
⑨	「わかる」	1	1	⑨	上昇調の nie	1	1
⑩	複数項目の重 複	50	108	⑩	複数項目の重複	17	28
計		90	589	計		37	174

ここでは、両者がお互いに相手の発話に対して「ねえ」で同意・共感を示している。日本語会話では、特に両者の主張が一致している時に、しばしば「ねえ」の応酬が観察される。このように、通常はさまざまな語の末尾につく終助詞が、単独でも「共感」「賛同」を表す用法を持っており、頻度から見てもかなり好まれて用いられていることがわかる。（<よ>は単独形では用いられず<だよー>のように「だ」に後続して用いられる。）日本語の「よ・ね」に似た機能を持つものとして、ポーランド語には、文中や文末に置かれて相手への同意・共感要求を示す „nie” „wiesz” などの言語表現があるが、聞き手のあいづちには用いられない。

その他、④相手の発話の引用も日本語会話では多い。話し手が発話した語句、表現を自分の発話に取り込むことは相手との同調であり、歩み寄りの協調姿勢を示すが、日本語会話においてその性格がより強い傾向があると言える。一方、ポーランド語会話では③副詞系の

表現< *dokładnie, właśnie, dosłownie, na pewno, jasne* >等がよく観察される。日本語では「その通り、まったくだ、本当に、確かに」等になるが、日本語会話ではこれらの発話は割合的に少ない。

1.4 聞き手の言語的反応における両言語間の特徴

以上、聞き手の言語的反応の種類について分析した結果、日本語とポーランド語を比較して、次のような相違点、特徴が導き出されるだろう。

- ・ 聞き手の言語的反応がもつ機能で、重要なものは「傾聴」「理解」「賛同・共感」「感情・感想」の表明の4種であり、それらが合わせて総発話中に占める割合も両言語間で似通っており、この点において言語間の差はない。
- ・ ただし、「理解・納得」(B2)及び「賛同・共感」(B3)の詳しい言語形式を見ると、日本語では同じ語句の反復や助詞の添加、違う種類の語形を組み合わせる等の方法により、形式のバリエーションが豊富である。また、相手の発話を引用する形の表現も好んで使われている。一方、ポーランド語では同一語句の反復回数はあまりなく、日本語の終助詞に相当する表現形式もない他、違う種類の語形を組み合わせる用法も日本語ほど多くない。逆に、命題の真実性に対する話者の判断を示す副詞類が、聞き手の言語的反応として日本語の場合よりもよく用いられる傾向がある。
- ・ その他、発話機能別に見た細部での相違点として、日本語会話においては、「十分な理解は伴わないが、話の先を促す」聞き手の言語行動は、非常によく観察される普通の会話現象で、これから話を展開しようとする話し手の意思を支持する聞き手の協調的な姿勢の表れであるが、ポーランド語会話においては本研究の資料では皆無である。即ち、ポーランド人の聞き手は、話し手の発話内容がある程度理解できるまでは沈黙して話を聞く、相手の発話を邪魔しないという姿勢が聞き手に求められる態度であると推測ができる。
- ・ また、ポーランド語会話では非共感を表明する発話が比較のためらいを伴わず自由に表現されていること、話し手の発話権に介入する性格を持つ先取り発話が多いこと等から、聞き手が、発話権を持たない間にも自分の意見を積極的に話し手に伝え、会話に反映させようとする姿勢が強い。一方日本語会話では、

聞き手が自分の心的状態や思考内の変化を話し手に開示する表現も回数も多く、より情意的な側面で協調的な態度を示そうとする姿勢が強い。

2.0 話者交替の様相について

前項までの検証は、聞き手が発話権の取得を主張しない、聞き手の役割を逸脱しない範囲での言語行動の様相を分析したものである。続く本項では、聞き手が話し手に替わるために、つまり発話権を獲得するためにどのような方策を採るか、その積極的な会話参加の形を探り、日本語会話とポーランド語会話では聞き手の言語行動にどのような違いがあるかをさらに視点を広げて見ていくこととする。

2.1 聞き手が発話権を取得する方法

Sacks らの話者交替のシステムに関する論文(1974)によれば、会話では、一時的な発話の重複を除き、通常は一人の話者が話をし、他者は聞き手にまわって話を聞き、その話者が話を終わると次の話者が話を開始するというように、会話参加者の間で発話権をお互いに受け渡ししている。二者間の会話で話者交替が起こる場合の様相を分けると、次の3つの状況が考えられる。以下、Sはそれまでの話し手、Hはそれまでの聞き手とする。

1) <聞き手の自己選択> Sのひとまとまりの発話内容が完結し、二者がどちらも発話権を自由に取得できる状況で、Hが発話権を取得する。

次に挙げた例の場面では、岡田が友達との散歩の経緯を話し終えた後、それまで聞き手だった清水が、自ら発話権を取得し、自分のエピソードを話題に取り上げて話者交替している。

例8) 資料日1 (日本語会話第1組)

岡田：そんな音とか騒がしくしてもあかんしとか思いながらめっちゃ一人でこ

清水： うん／

岡田：そこそこうやって／ ははは、帰らな☆／ そう、

清水： へえええ／ へえええ／

岡田：帰って来た☆。／ うん／

清水： でもな／なんかあたしの友達でな／ 外人ばっかと

2) <聞き手の発話権奪取> Sが発話権を維持している場所で、Hが発話権を奪取する。これは一般的に「割り込み」と呼ばれる行為であるが、その割り込み箇所がP P U (メイナード(1993)が採用した **Pause-bounded Phrasal Unit** という概念で、ポーズにより区切られる語句という単位を指す。本研究のSCRIPTでは「/」でそのポーズの個所が表示されている。) 末か否かで不作為的か強制的か性格が異なる。通常、聞き手は話し手の話にあいづちを打ちながら、展開の先を予測しつつ適切な話者交替箇所を探っているが、現実には、現在の話者に話の先を続ける意図がもうないと言葉で明白な意思表示をされない限り、聞き手には客観的に判断はできない。従って「割り込み」にも、P P U末の位置との関係から、聞き手の単なる予測失敗による不作為的な「割り込み」と、話し手の発話中に意識的に行う強制的な「割り込み」と大きく分けて二つの性格がある。次にその実例を挙げる。

例9) 資料ボ4 (ポーランド語会話第4組)

Iwona :

Kasia : nalepkę z, nalepkę z literą R,/ i to wszystko. Ha! Boże Świąty!/
Iwona : Noo, cieka, ciekawe co by się stało po prostu, po wypiciu czegoś takiego,

Kasia : Czego to Polacy nie wymyślą./

イボナ :

カシャ : 「R」のラベルのあるあのお酒。/それだけ、はは！なんてこと。/
イボナ : そうよね、そんなの飲んだ後には一体どうなることやら。

カシャ : ポーランド人が考えることって！/
イボナ :

例9では、聞き手のイボナが話者交替箇所と予測をして発話を開始したが、引き続きカシャも話し続けたために発話の重複が起こっている。イボナの瞬時のためらいは語句の反復 (cicka,ciekawe...) に観察されるが、発話をそのまま継続し、話し手に交替している。

例10) 資料ボ6 (ポーランド語会話第6組)

Agata : Znaczy ona po prostu, ona.../
Marzena : bo u mnie w klasie też była taka dziewczyna,/ która miała bardzo,

Agata : Ona się fascynowała „Ogniem i
Marzena : słuchaj, same piątki i tak dalej, szóstką, ale jak się miała.../
アガタ :

マジェナ : 私達のクラスにもある女の子がいたんだけど/その子、すごく

アガタ : 彼女は『Ogniem i Mieciami』
マジェナ : 聞いて、いつも5ばかりとか6とかも取ってて、でも…／

一方、例10では、例9よりも強制的割り込みの性格が強い。マジェナが自分の昔のクラスメートに関する話を始めたところで、アガタは自分が展開していた話題に戻そうとマジェナの発話中に一度割り込むが失敗する。ここでマジェナが発話権維持を主張する姿勢は、自分の発話への注目要求の„*sluchaj*”（聞いて）に顕著に現れているが、アガタは再度の割り込みを試み、二度目はマジェナが自分の発話を中断し発話権を譲って聞き手にまわり、アガタに話者交替している。

3) <話し手からの発話権譲渡> 質問、確認、勧誘などの発話で、SがHに発話権を譲渡し、Hが発話権を取得する。

例11) 資料日4 (日本語会話第4組)

れいこ :

ななえ : 行ける人だけでも行かないって誘おうかなと思ってる。／ 行く?／

れいこ : いいねえ!／ 星の王子様ミュージアム。／ いつ、いつ帰んの?／

ななえ :

れいこ : だめっす。／

ななえ : えーつとね、25から31の間。／ だめ?／なんか

この例では、質問→答えという形で滑らかに話者交替が行われている。このように、それまでの聞き手が新たに発話権を取得するには、以上3通りの方法がある。このうち、最も話者交替が自然に行われるのは（話し手の発話権を脅かさないという意味で）、1)と3)で、2)は発話権の競合状態を誘発し、スムーズな話者交替とならない。複数話者の同時発話は多くの会話で観察される普通の現象であるが、最終的には一人の話者が発話権取得に成功し他者が聞き手に回って事態が収束するということは即ち、基本的には一人の話者が話す状態が最適な会話状況であり、それを回復しようとする力が参加者の間で働いていることに他ならない。つまり、2)は会話の流れにおいて不適切な、一時的な緊張を生み出す場面であるということがわかる。しかし、行動形態上は相手の発話権への介入行為であっても、前述したように割り込み箇所によってその作為度が異なり、さらには割り込み発話の内容如何では、話し手の発話内容を補

足したり賛同意見を表明して話題展開をさらに促す協調効果を持つものもある。次の例12は、話し手が展開する流れに即した内容の割り込みであり、話し手に対して協調的な態度と言える。しかし、例13では、両者の間で話したい事が異なり、お互いに主張しあって話題の競合が起こっている。ここの割り込みは協調的とは言えない。

例12) 資料日5 (日本語会話第5組)

しおり：節分って何食べるんだっけとかってあたし考えたけど☆。/
さえこ：節分一で特に食べるもの
しおり：そうだよ、豆だよ。/
さえこ：って、だからあたしもなかったよ。 / 豆を歳の

例13) 資料ポ7 (ポーランド語会話第7組)

Teresa : Fakt, że był swinia, bo ją zostawił z dzieckiem. / Tę dziennikarkę... /
Maria :
Teresa : Ale podejrzewam, że ona też miała
Maria : Ale wracając do tego, co chciałam powiedzieć... /
Teresa : swój udział, bo tak / bała się go trochę. / Uważała,
Maria : No, ona była / ciągle zajęta. /
Teresa : że jest nienormalny i tak dalej. /
Maria : Ciąg, ciągle zajęta była. / Ale / wracając do tego, co chciałam

テレサ：彼女と子供を残して逃げたんだから、くずよ。 / あの記者の彼女
マリア：
テレサ：を。 / でも彼女の側にも原因はあった
マリア：でも、私が話したかったことに戻ると… /
テレサ：と思うわ。だって / 彼をちょっと怖がってたもの。 /
マリア：そうね。
テレサ：普通じゃないのかなんとか思って。 /
マリア：彼女はずっと / 忙しくて / ずっと、ずっと忙しくて。 /
テレサ：
マリア：でも / 私が話したかったことに戻ると、

例13は映画の内容についての会話部分で、当初マリアが主導権をとって自分の意見を話し始めたところ、主人公の少女の年齢についてテレサが異議を唱えて話題が脱線し、さらに他の登場人物に話題が移行してしまったところである。テレサの発話が途切れ、一区切りついたと思われた箇所でもマリアが発話権利を取得し、話の流れを

もとに戻そうと試みるが、その発話を遮るようにテレサが自分の話題の継続を主張する。いったん発話権をゆずったマリアは同意を示す発話で再度発話権を取得するものの、その発話途中でテレサが二度目の割り込みを行う。両者の発話が重複するが、マリアは今度は自分の発話を中断せず、テレサの発話が終わったところで、自分の本来話していた話題に流れを引き戻す。マリアが主導権回復を強く意識していたことは、二度目の割り込みを受けた際に、同一語句を何度も反復しながらも発話を中断させなかった態度に見て取れる。以上、3つの聞き手の発話権取得方法のうち、3)よりも1)、特に2)は聞き手の最も積極的な会話参加態度と言える。よって、この中でも2)を重点的に、さらに話し手の展開する流れに協調的か否かという発話内容の点も考慮し、本研究の資料における聞き手の発話権取得状況について、次項で分析結果を明らかにする。

2.2 日本語会話とポーランド語会話における、種類から見た話者交替の様相

まず、両言語7組ずつ、全14組の会話における話者交替回数は、表4のようになった。

表4 <話者交替の回数>

日本語会話	回数	ポーランド語 会話	回数
第1組	99	第1組	82
第2組	191	第2組	72
第3組	149	第3組	55
第4組	206	第4組	111
第5組	145	第5組	173
第6組	123	第6組	104
第7組	178	第7組	166
平均値	155.9	平均値	109.0
標準偏差	35.29	標準偏差	42.07

会話の中で、一人の話者が経験談や出来事について話す物語部分が長くなれば話し手と聞き手の役割が固定化し易い。話者交替の回数もその時の話題に影響される変動的なものではあるが、今回の資料

14組を総合的に見ると、同一言語話者間のばらつき具合は両言語で似通った結果になった。これを見ると、同じ時間内（20分）で日本語話者の方が、平均して1.5倍近くは話者交替が頻繁に行われているということがわかる。主たる話し手と副たる聞き手、両方の役割を両者が相互に担って会話を構築するという共同作業の性格が日本語においてはより強いということが言えるだろう。

では、その話者交替の仕方は二言語間で差異があるだろうか。前述したように、話者交替には大きく分けて3通りある。ここで、その話者交替が行われた場所がPPU末か否か、もとの話し手の展開する流れに沿う内容か、もとの話し手の発話権にどの程度介入するものか等を考慮して、さらに次のように下位区分を試みた。

I. 聞き手の自己選択	
II. 聞き手の発話権奪取	— 1. PPU末で—A. B. C. D. E. F.
	2. PPU途中で—A. B. C. D. E. F.
III. 話し手からの発話権譲渡	— 1. PPU末で 2. PPU途中で
IV. 話し手の発話権維持	a. 情報の付加等 b. 発話権の回復

表中のI. II. III. は前項で紹介した話者交替の種類（1）、2）、3）に相当する。IVについては後述する。IIとIIIをPPU末の位置との関係で1と2に区分し、IIは、それまでの話し手が展開する発話内容との関係から、さらにその下にAからFまで6種類のカテゴリーを設けた。それぞれの内容は次の通りである。

A = 相手の発話内容に関する質問や確認

B = 相手の発話内容に肯定的、共感的な意見や感情を表すもの

C = 短い情報提供や中立的な意見など、相手への態度が無色のもの

D = 話し手の話題に則しているが、自分の経験談や伝聞したことなど新情報を提供するもので、自分の長い主ターン発話を導くもの。会話の主導権を握る意図をもつもの

E = 相手の発話内容に否定的、非共感的な意見や感情を表すもの

F = 話し手の話題と関連性の薄い話題を持ち出したり、別の話題に変える、自分が出した話題に固執し戻ろうとするもの

話し手に協調的な割り込みとはAやBで、これらは比較的発話も短く、発話権が元の話し手にすぐ戻る傾向が強い。それに比較するとDは、話題の関連性はあるがそのまま会話の主導権が新しい話し手（元の聞き手）に移行する性格を持ち、元の話し手の発話権を侵害するという点ではAやBより協調性がやや薄れる。EやFは不賛同や非共感の態度表明で、話し手が展開する流れに逆行する性質を持ち、元の聞き手側の比較的長い発話が予測され、そのまま発話権が移行するか、あるいは発話内容の性質上、元の話し手との発話権の競合が起こる可能性も高い。特にFは話し手が展開する話題を支持せず、話題展開の主導権を主張するもので協調性は最も薄いと言える。このようにAからFは、同じ割り込みでも話し手への姿勢、発話権の侵害度が異なっている。

Ⅲの1. 2. とは、話し手の質問等の発話が終わってから応答をする場合は1で、発話末尾を予測し先取り応答する場合は2に入るという意味である。Ⅳのaは、話者Aが質問等の発話を終える前に話者Bが割り込みをして発話権が移行するが、話者Aが最後に必要な情報を付け加えるために後で短く補足する発話で、「割り込み」とは言い難く、Ⅱで下位分類したFとも全く性質が異なる。また、Ⅳのbは、例えば先行する話題が、話者Aから話者Bへの質問であったとして、話者Bがその質問への答えを出す前に、話題がずれて脱線した場合の発話権回復を指す。つまり、話者Bが答えの情報を提供するまでは、話者Bに優先的な発話権があることは両者の間で自明のことであり、話題の脱線がおさまり、話者Bに答える発話権が回復するのは話題展開上当然期待される結果であるので、Ⅰの<聞き手の自己選択>とは性質が異なる。従って、以上2点はⅣ<話し手の発話権維持>として別項目に立てた。

このようにして、話者交替の種類を17項目に分類し、その分布状況を調べたのが表5である。まず、日・ポどちらの会話資料においても、Ⅰ～Ⅳ全ての話者交替が観察された。しかし、その様相は異なっている。

両言語ともⅠが最も多いのは当然の結果と言える。話し手の発話が完結し、両者どちらにも発話権取得の権利がある話者交替適切箇所ですら交替するわけであるから、これは最も自然でトラブルがなく円滑に会話が進展する話者交替方法である。

表5 <話者交替の種類>

		日本語会話			ポーランド語会話					
		交替回数	%		交替回数	%				
I		687	63.0%	63.0%	396	51.9%	51.9%			
II	1	A	18	1.6%	3.6%	5	0.7%	4.2%		
		B	15	1.4%		7	0.9%			
		C	4	0.4%		10	1.3%			
		D	1	0.1%		2	0.3%			
		E	1	0.1%		5	0.7%			
		F	0	0.0%		3	0.4%			
	2	A	29	2.7%		6.3%	19		2.5%	19.0%
		B	27	2.5%			31		4.1%	
		C	11	1.0%			23		3.0%	
		D	1	0.1%			7		0.9%	
		E	1	0.1%			22		2.9%	
		F	0	0.0%			43		5.6%	
III		247	22.6%	24.0%	124	16.3%	19.4%			
		15	1.4%		24	3.1%				
IV	a	14	1.3%	3.1%	11	1.4%	5.5%			
	b	20	1.8%		31	4.1%				
計		1091			763					

次に自然な話者交替は発話権譲渡のⅢである。日本語会話ではⅠの次に2番目に多いが、ポーランド語会話では、Ⅱの割り込みの方がⅢよりも多い結果となっている。Ⅲの中でも言語間で差があり、相手の質問や勧誘、確認等の発話の終了を待たずに先取り応答する2のタイプがポーランド語では比較的多い。Ⅳも予測・期待されるものであるという点で、Ⅰ及びⅢに準じる比較的自然な話者交替と言える。話者が本来主として展開されるべき話題に話を戻すⅣ-bがポーランド語会話で多いという結果は、会話全体の流れを見た場合に、物語や事柄・意見の説明等比較的多く発話権を保持する必要のある種類の発話が、ポーランド人の場合多い、またその途中で聞き手が一時的に発話権を奪取し元の話し手の発話権が中断する現象が

多いという可能性を示唆している。

さて、話者交替の種類で最も顕著な差が見られるのがⅡの割り込みである。日本語会話では全体のおよそ10分の1しかないが、一方、ポーランド語会話では話者交替の約4回に1回の割合で割り込みが起こっている計算になる。さらにその内訳においても、PPU未で発話の重複が起こる不作為的な1に対して、相手の発話中に意識的に割り込む2が示す比率は、ポーランド語話者の方が高い。また、AからFのうち、話し手に協調的な姿勢寄りと言えるA～Cの総計がⅡ全体の中に占める割合は、日本語で96%以上に上るのに対し、ポーランド語では54%とほぼ半分にしかならない。即ち、話し手に非協調的な性格を帯びる割り込みが、ポーランド語では半数近く観察され、その点、日本語と大きな違いがあることがわかる。

本項では、聞き手の言語行動の中でも、単に話し手の発話に対して心的な態度を表明したり情報を提供して話題展開を副次的にサポートするだけの控えめな行動面ではなく、発話権を取得して話し手になり、会話の主流を作る役割を獲得しようとする積極的な行動面に目を向けてその解明にあたった。結果、その積極性がより明白である割り込み型発話はポーランド語会話に多く、さらにその内容も、日本語では相手が展開する話題の範囲内において、内容の幅を広げるために質問をしたり、自分の賛同意見や共感する心情を表明する協調路線型割り込みが多いのに対し、ポーランド語では自分の経験談や新情報を伝達したり時には反対意見を表明することで話題の幅を広げたり、あるいは自分の展開したい話題に流れを誘導する等の自由路線型とも言うべき割り込みが多いことが明らかになった。なお、日本語会話で聞き手の言語的反応が頻繁にあることと、割り込みが少ないこととは無関係ではない。つまり日本語話者は、まず相手の発話に対し、あいづちで反応を示してから、実質的な内容を伴う自分の発話に入る会話技術をしばしば用いるのである。そのため発話権の競合が起こりにくい。次の例を見てみよう。

例14) 資料日2 (日本語会話第2組)

まり： だよね。今まで、だってジュ
えみ：アイスクリームの販売機があるー！と思って。／
まり：一スしか見たことなかったから結構／意外だったよねえ。／
えみ： うん／ そう、
まり： うん／ なんかねあのねミントの／
えみ：すごい衝撃的だった、ほんとに。／

アイスクリームの共通の思い出を語っている場面であるが、下線部を見るとわかるように、両者とも自分の話し手としての発話の前に、まずあいづちで共感や理解を示す手法をよく用いている。これは、心理的な親しさを示すだけでなく、間にB発話、すなわち発話権を取得しない聞き手の発話を置くことで、いわば話者交替の唐突さや相手から発話権を奪う行為の無遠慮さを和らげるクッションの役目を果たす効果も持ち、発話の重複も起きにくく、会話展開をより円滑なものにしている。この用法はポーランド語会話においても見られるが、日本語会話ほど多くはない。ちなみに、話者交替の箇所でのその直前にB発話が先行した件数を調べると、日本語では1091件中321件で29.4%が共起しているのに比べ、ポーランド語では763件中75件で9.8%しかB発話が見えていない。B発話がスムーズな話者交替に果たす役割が日本語会話で非常に大きいことがわかる。

2.3 日本語会話とポーランド語会話における、発話権が重複した場合の対処法の相違点

次に、II型の割り込みで話し手側がどう対処したか、聞き手の発話権奪取が成功した場合に話し手は発話をどう管理し発話権を譲渡したかについて述べる。続いて、**表5**には表れない、聞き手が割り込みを試みて失敗した、即ち話し手がそのまま発話権を維持した場合の事例について述べ、日本語会話とポーランド語会話で、発話権が重複した場合に二者がどのような態度を取るか、その傾向の解明を試みる。

まず聞き手の割り込み時に話し手の発話はどうなっていたかという観点から、以下のように5つの場合に分類する。

- ① 発話の重なりなし。
- ② 話し手の発話の末尾部分に聞き手が割り込む。
- ③ 割り込みを受け、話し手が発話を中断、発話権を譲渡する。
- ④ 割り込みがあっても、話し手も発話を完結させる。
- ⑤ 割り込みがあっても、話し手も発話権を主張し続ける。

①の場合は、聞き手の割り込み発話と話し手の発話が重ならないもので、表面的には発話権の競合は発生していない。話し手から聞き手への発話権の移行が円滑に行われている。

例15) 資料日3 (日本語会話第3組)

さゆり： あ、猫はねえ。／ へええ／
よしみ： 気まぐれだから。／ すーごい気まぐれ。／もう結局
さゆり： うん／ え、よしみが飼ってたの？／
よしみ： ねえ／ えっと…／ 違う、3…／

上記の例はよしみの猫が話題で、聞き手と語り手の役割は固定している。よしみの発話権の保持は、先行する発話に「もう結局ねえ」と談話展開の開始を示す表現が使われ、かつ「えっと…」というフイラーでこれから発話する内容を思考内で整理し組み立てていることから観察可能であるが、さゆりが質問を割り込ませる。これは表5ではⅡ-1にあたる。

②の場合は、話し手の発話の末尾に聞き手の割り込みが入るもので、以下のような例がある。

例16) 資料日4 (日本語会話第4組)

れいこ： あ、でもあたしね／もしかして授業料とか稼ぎ
ななえ： 遊べるんじゃない？／ うん／
れいこ： たいから／ 結構入れるかも。／
ななえ： うんうん／ え、授業料もしかして自分で払えっ
れいこ：
ななえ： て言われた？／

この会話部分では、れいこの発話の末尾部分にわずかにななえの質問の開始部分が重なっている。これら②は、発話の重複部分が短く、かつ話し手側は発話を終わらせる方向にあり、聞き手側は展開させる方向にある、即ち発話権交替の流れに逆らう性質を持たない重複であるという点である。この型の割り込みは、聞き手側が話し手の発話の終了を予測し、わずかに早く発話を開始させる、いわばバトンリレーの走者交替時に次の走者が走り出しながらバトンを受け取るのと同じで、発話権の交替の連結部分を作るものであり、交替を滑らかに接続させ、無駄な空き時間を置かずに会話展開にテンポや活発さを生むプラスの効果を持つ会話管理手法と言える。

③の場合は、聞き手の割り込みを受けて話し手が自分の発話を中断

させ、聞き手に回って相手に発話権を譲渡するもので次のような例がある。

例 1 7) 資料日 7 (日本語会話第 7 組)

ゆきの：うんうん／

あや：高くって／ま、でもいろんな種類のお風呂があるんでしょ、たぶ

ゆきの：あ、そうだっけ／ なんか一回行って…／

あや：ん。／ うん／あの一／おみやげの…／

ゆきの：あたし／何しに／

あや：

④の場合は、聞き手の割り込みを受けても話し手が自分の発話を結させるもので、資料中には次のような例がある。

例 1 8) 資料ポ 1 (ポーランド語会話第 1 組)

Ania : jeszcze wybierałyśmy samochody, gdzie był tylko kierowca. / Tak że,

Gosia : mhm /

Ania : no to, wiesz, no co. / co mógł nam zrobić. /

Gosia : !!!Boże! / A ja kiedyś byłam taka głupia, z moja kuzynką we dwie niby

アニヤ：それから車を選ぶ時は運転手が一人だけの車を選んだの。／

ゴシャ： うん／

アニヤ：分かるでしょ、それなら／ 一人なら私達に何もできやしないし。／

ゴシャ：そう言えば!!! / 私いつかすごくバカなことしたのよ、

割り込まれた話し手が文末まで発話を継続するという意味では、前述した②の末尾における割り込みと性格は同じであるが、重複している部分が④の場合は当該発話内容の重要な部分を構成しているという点で異なる。④の場合は、発話が重複している事実を話し手が認めつつも、自分の発話終了まで長時間を要しないため中断せずそのまま完結させたものと言える。

最後の⑤は日本語会話資料では 1 件も観察されなかった。ポーランド語資料には次のような例がある。

例 1 9) 資料ポ 6 (ポーランド語会話第 6 組)

Agata：

Marzena : w ogóle no ci ludzie byli tacy otwarci, tacy, tacy kochani, no tacy, wiesz,

Agata : Ale daj spokój! / Wiesz co. / na przykład w „Potop” to

Marzena : zupełnie bezproblemowi, / oni to, słuchaj, cały czas by nami się zajmowali

アガタ :
 マジェナ: 彼ら、すごくオープンで気さくな人達で、こう、分かるでしょ、
 アガタ : バカなこと言わないで！／ だって／ 例えば『洪水』なんて
 マジェナ: 全然問題ない人達／ 彼らは、聞いてよ、彼らは滞在中ずっと私達
 アガタ : 作品には何も語る
 マジェナ: の世話をして

これは、マジェナがオランダに行った際にオランダ人達がパーティー好きで開放的でとても良い印象を持ったという話をしている場面で、アガタが„Potop”という小説には何も語るべきところはないと割り込み発話をする箇所である。„Potop”に関しては、マジェナのその旅行の際にポーランド語の先生が「ポーランドに帰ったら„Potop”について話し合う」という課題を与えたと先行発話でマジェナが触れており、話題に全く関連がないわけではないが、マジェナにとっては話題の中心はオランダ人達の気質や応対であって、„Potop”ではない。ここでは両者の間で取り上げたい話題が異なり、衝突している。発話権の主張態度は、アガタの„Ale daj spokój!”という強い口調の発話や、„wiesz co”という注意喚起の発話と、割り込まれた側のマジェナの„sluchaj”という注意喚起の発話に明白に観察される。前述した④も割り込まれた側が発話を完結させるケースであるが、これらの⑤は、一旦発話権を譲った相手が再度割り込んで発話権を主張したり、いずれかの話者の話す音調に速度や高さの面で有意な変化が見られる、相手の注意喚起を示す語句が挿入される、発話権主張を明示する表現が使われる、重複が終了するまでが長いという特徴が見られ、明らかに両者が積極的に発話権を主張したもので、①～④と全く異なるものである。

さて、このように、割り込まれた時の話し手側の発話の様相を基に以上の5項目を設け、前項の**表5**で示したⅡ型割り込み件数を分類したものが**表6**である。

この結果で注目されることは、①重なりなしの場合と②話し手の末尾に重なる割り込み、つまり割り込み発話があっても発話権の移行がトラブルなく行われる率は日本語会話の方が高い傾向にあること、また、日本語会話には⑤発話権の競合を誘発した割り込みが観察されなかったことである。無論、対立意見を戦わせる議論などでは日本語話者でも割り込みの応酬になることが予想されるが、友人との日常会話では同調・共感が会話の基調をなすものであって、同意・

共感を示す副ターン発話が頻繁に出現することはあっても、相手の発話権を侵害するおそれのある主ターン発話の割り込み現象は現れにくい。実際ポーランド語会話でも、話者相互が割り込む⑤の割合は低く、またその中でも反対意見の割り込みで発話権の競合が発生したケースは1件しかない。興味深いのは、相手に賛同や共感を示す発話、中立的な意見や単なる情報提供の発話でも、対話者同士が積極的に発話権を獲得しようとすることである。日本語話者が頻繁に副ターン発話を発することで会話に協調性を生み出す会話管理方法を用いるのに比べ、ポーランド語話者は割り込みという言語行動を比較的肯定的にとらえ、両者が積極的に意見や情報を提供し交換することで相互協力し、会話の進展を図っていると思われる。

表 6 <割り込み時の発話重複現象>

		日本語会話						ポーランド語会話					
		①	②	③	④	⑤	計	①	②	③	④	⑤	計
II	A	16	19	9	3	0	47	5	12	7	0	0	24
	B	7	22	6	7	0	42	6	20	7	2	3	38
	C	3	8	4	0	0	15	10	9	10	1	3	33
	D	0	1	0	1	0	2	0	5	1	2	1	9
	E	1	0	1	0	0	2	7	10	8	1	1	27
	F	0	0	0	0	0	0	5	13	16	7	5	46
計		27	50	20	11	0	108	33	69	49	13	13	177
		25%	46%	19%	10%	0%		19%	39%	28%	7%	7%	

さて、ここまでは聞き手の発話権獲得が成功した場合について検証してきた。しかし、現実には聞き手が獲得に失敗した場面も数多くある。本項の最後にそれを取り上げ、2.2項の結果と合わせて、二者間の発話権の取得・維持・譲渡等の会話管理を日本語話者とポーランド語話者はどのように行っているかを総合的にまとめる。

聞き手が発話権を獲得しようとして失敗する場合には、2.1項の1) <聞き手の自己選択>場面での失敗、2) <聞き手の発話権奪取>での失敗があり、後者はさらにPPU末での割り込みか、話し手の発話途中での割り込みかに分かれ、結局全部で3通りが考えられる。以上3種類の失敗件数は、日本語会話とポーランド語会話では**表7**のようになった。

表7 <聞き手の発話権取得失敗件数>

	①自己選択 失敗	②PPU末 で失敗	③発話途中で 失敗	計
日本語会話	17	8	12	37
%	45.9%	21.6%	32.4%	
ポーランド語 会話	16	7	36	59
%	27.1%	11.9%	61.0%	

日本語会話の話者交替回数は7組総計で1091回、ポーランド語会話では763回である。**表5**と照らし合わせると、ポーランド語会話の場合、話者交替回数が少ない割に聞き手の発話権獲得失敗件数が多いということがわかる。ちなみに失敗件数も含めた総数で割ると、日本語会話での失敗率は3.3%、ポーランド語会話では7.2%と倍以上である。さらにその内訳も、日本語話者はポーズが置かれる話者交替適切箇所両者の発話が重複して、聞き手が退くケースが多いのに対し、ポーランド語話者では話し手の発話途中で聞き手が割り込みを試み、失敗するケースがかなり多いことが読み取れる。

2.4 話者交替の様相について：まとめ

2.2項での検証と2.3項の発話権重複時の分析結果を総合し、以下の結論が導き出されるだろう。

即ち、どちらの言語においても、話者交替は二者がどちらも自由に発話権を取得できる話者交替適切箇所で行われるものが最も高い割合を占めるが、日本語話者の方がよりその傾向は強く、聞き手の割り込み行動においても話し手がポーズを置いた箇所でも割り込み、かつその発話内容はほぼ全て、質問・確認や、賛同・共感意見を示すものである。つまり、話し手が展開する話題の範囲内を逸脱せず、その中で内容をより拡充させるための質問や確認で相手の話題展開を支持する協調的な態度を表明したり、賛同・共感を示して情意的なメッセージを伝えるものが多い。さらに、割り込まれた側の話し手の態度も、自分の発話をすぐに中断させるか、ないしは発話末尾の割り込みのため短く完結して終える形が多く、発話権の競合のトラブルが少ない。また、話者が聞き手に発話権を譲渡する質問・勧

誘等の発話も日本語話者には多く、聞き手の返答も話し手の発話終了を待ってなされることが多い。即ち、ここでも話者交替時の発話権衝突ができるだけ少ない形で行われている。

一方、ポーランド語話者の場合は、話し手の発話途中に割り込む積極的な聞き手の姿勢がよく観察され、その発話内容も質問・確認や賛同・共感意見だけでなく、新情報の提供、自分の経験談の披露、反対意見、ないしは自分が提示した話題に固執する等、日本語話者と比べて非常に多岐にわたり、対話者に対する協調路線型のスタイルというよりは情報提供型、自由路線型の会話参加スタイルということが言える。また、成功例、失敗例も含め、聞き手が発話権を獲得しようと試みる傾向はポーランド語話者の方が強く、その意味でも、会話の参加者相互が、話者交替適切箇所を待ったり、質問の形で相手から発話権を譲渡されるのを待つのではなく、自ら積極的に発話権取得を主張し、その意思を表明する姿勢があると言える。質問への応答でも日本語話者と比べて先取り発話の形が多く、テンポの速い会話展開がよく観察される。また、割り込まれた側の話し手の態度も、今回の日本語会話資料では1件もなかった発話権の競合がポーランド語会話では観察されている。これは、聞き手からの発話権介入を受けつつも話し手が自己の発話権維持を主張し続けるもので、割り込みに対する日本語話者の受動的で、ある意味消極的な態度に比べて、非常に能動的で積極的な言語行動である。ポーランド語話者において、同時間内（20分）の話者交替回数が日本語話者より少ないにも関わらず失敗回数が多いのは、聞き手の積極性だけでなく、話者の発話権主張が強いことも意味している。即ち、ポーランド人は友人との日常会話場面において参加者相互が発話権のやり取りに積極的に関わる、例えるならサッカーやバスケットボールでのボールの激しい奪い合いに似た活発さやスピード感を帯びた会話を展開しており、その点、日本人の場合は、いわばバレーボールにおけるボールの移動に似たもの、つまり一定時間のボール保持の後には必ず相手コートに渡されるのと同じで、均等に頻繁に話者交替がなされるよう、またその交替もトラブルなく行われるといった比較的穏やかな会話をしていると考えられる。

3. 結論

筆者は日本語教育でも特に会話指導を主に担当しているので、学習者の母語と日本語との異文化間での、コミュニケーション技術の違

いやその習得法に関心を寄せている。本研究の意図は、日本語母語話者とポーランド語母語話者がそれぞれどのような会話管理技術を用いているか、実際の音声会話資料をもとに分析し、その実態を説明して、ポーランドにおける日本語教育現場での会話指導の参考とすることにあった。日本社会では、「話し上手は聞き上手」と言われるように、人と上手に会話をするには聞き手としての技術が不可欠であり、外国人への日本語教育学においてもその指導の重要性が以前から取り上げられ、研究が盛んに行われている。一方、ポーランド語教育学においては、〈外国へ移民したポーランド系住民やその子孫への母語教育〉としての側面では研究が盛んであるが、〈純粋に外国人を対象とした、外国語としてのポーランド語教育〉としての側面は、まだ発展途上段階にあると見受けられ、さらに「聞き手」に視点をおいてポーランド語の会話分析を行った先行研究はほぼ皆無に近いと言って良い。「聞き手の発話」は、ポーランド語学では未開拓の領域である。

前稿及び本稿で、筆者は主に聞き手の言語行動を中心に、両文化間での会話管理手法の違いの解明を試みた。発話権の取得を主張しない、「あいづち」という副ターン発話で対話者の話題展開をサポートする副次的な側面と、割り込み等を行い、発話権を取得して話し手へ移行する積極的な側面とをあわせ、聞き手の言語行動を全体的に見てきた結果、次のような違いが導き出された。即ち、日本語話者は、「聞き手である時には語形の豊富な副ターン発話を頻繁に発し、相手の話題展開や発話内容の支持を積極的に示すことが多く、話し手である時も相手への発話権の譲渡がなめらかで発話権の競合が起りにくい。また話し手と聞き手の役割も会話参加者同士が上手に配分して共同作業の性格が強い。つまり、相手の発話権をできるだけ侵害しない副ターン発話を活用し、同意・賛同を頻繁に表明し、お互いに同じ意見や感情を共有しているという、主に情意面での満足を両者が得ることを重視して会話管理を行っている。」と言え、逆に、ポーランド語話者は、「聞き手の副ターン発話自体が頻度も語形も少なく、その中でも反対意見や先取りなど主ターン発話に似た性格を持つ発話があり、日本語話者よりも積極的に自由な会話参加姿勢が見られる。つまり、会話参加者同士が積極的に発話権を主張し、話し手となり、自由な意見を交換してより多くの情報を得、話題を展開・拡充させること、情報の伝達面での満

足を両者が得ることを重視して会話管理を行っている」ということが言えるだろう。

参考文献（本文中での引用順による）

1. Sacks, Harvey, Emanuel A. Schegloff, Gail Jefferson (1974)
A Simplest Systematics for The Organization of Turn-taking for
Conversation, *Language* 50, 696-735.
2. メイナード・泉子・K (1993) 『会話分析』 東京都：くろしお出版

Nambō Sōkei

Nampōroku, czyli Zapiski z południowych stron

Rozdział II, CZĘŚĆ 2.

Tłumaczenie/translation/翻訳: Anna Zalewska

<Kontynuacja CZĘŚCI 1, która ukazała się w zimowym zeszytce *Silva Iaponicarum*.>

26. Sangatsu mikka Hiru

三月三日 昼

Trzeci dzień trzeciego miesiąca

W dzień

Ustalone, iż podane będą tylko ciasteczka

W pokoju wielkości czterech i pół maty

Jōko¹, Sōkei

- malowidło: brzoskwinie, pędzla Shunju²
- pejzaż na tacy: Podróżne Ścieżki
- kociołek z paulownią, na krótkim łańcuchu
- na półce *kyūdai*:
 - na dole
 - naczynie na zimną wodę: bez rysunku
 - (naczynie do wstawiania czerpaka:) ze spodem jak brzoskwinia
 - (naczynie na zużytą wodę:) z wąskim otworem
 - (podstawka pod pokrywkę:) czworoboczna „nocna nauka”
 - *fukusa*³

¹ 紹古, postać skądinąd nieznana.

² Jap. Shunkyo 舜举, właśc. chiń. Qian Shunju, jap. Sen Shunkyo 錢舜举 (?-po 1301), malarz chiński; szczególnie zasłynął swoimi pejzażami i malowidłami przedstawiającymi kwiaty i ptaki, tworzył kaligrafie, oraz sztuczne kwiaty, do których układał wiersze.

³ Jap. *fukusa* 帛紗, ozdobna jedwabna, kwadratowa ściereczka o ustalonej wielkości (zwykle ok 30 cm na 30 cm), używana podczas parzenia do wycierania na sucho utensyliów (takich jak *natsume*, *chaire*, *chashaku*), a poza tym do prezentowania

na górze

— na tacy do wonności: kadzielnica — Smugi Chmur, naczynko na kadzidło – podwójne, ozdobione macią perłową, stojak na pałeczki do kadzidła

— miotełka z piór

Po tym jak kadzielnica przeszła z rąk do rąk, poprawiono węgiel w palenisku.

△ wielowarstwowa, przenośna puszka na żywność

△ *mochi*⁴ z bylicą⁵

△ potrawa gotowana: kurczak, słuchotki opiekane na rożenkach, grzyby *shiitake*, fasola i węzółki z wodorostów

△ kasztany z wody

△ dwie kolejki sake

Później

— wnęka: tak jak było

— *kyūdai*

— na dole tak jak było

— na górze: naczynie na herbatę — z uszkami, na środkowej półce, *natsume*, dwie czarki jedna na drugiej, bambusowe *chashaku*

27. *Sangatsu nanoka Yoru*

三月七日 夜

Siódmy dzień trzeciego miesiąca

Nocą

W pokoju wielkości trzech mat

sprzętów, podnoszenia gorącej pokrywki kociołka itp; używa się także tzw *kobukusy*, mniejszej *fukusy*, na której np. stawia się czarki podawane gościom. *Fukusy* używa się już od czasów Jōō, zaś Rikyū miał ustalić jej wymiary.

⁴ Jap. *mochi* 餅, rodzaj placuszków lub knedelków przyrządzonych z ubitego na jednolitą masę ugotowanego ryżu specjalnego gatunku; do podstawowego ciasta na *mochi* dodaje się też np. czarną fasolkę, krewetki, wodorosty, nasiona sezamu, liście pachnotki (jap. *shiso*) itp. lub, jak tutaj, ugotowane liście bylicy.

⁵ Jap. *yomogi*, łac. *Artemisia princeps*, pol. bylica.

Horio Tatewaki⁶, Yamada Tsushima⁷, Sengoku Gombei⁸

Najpierw

— kaligrafia Dongyu

— kociołek: z wzorem padającego gradu

— na półce: uchwyty do kociołka, miotełka z piór

△ zupa: z łądgami ziemniaków i małymi ptaszkami

△ potrawa z octem

△ węgorz, pasta rybna na patyczkach

△ sałatka

△ słodycze: ryżowe ciasteczka, grzyby *shiitake*

Później

— naczynie na kwiaty: koszyk

— naczynie na herbatę: w kształcie stojącego bębena

— czarka: Daleka Plaża, bambusowe *chashaku*

— naczynie na zimną wodę: ceramika *bizen*

28. *Sangatsu kokonoka Hiryu*

三月九日 昼

Dziewiąty dzień trzeciego miesiąca

W dzień

W pokoju wielkości czterech i pół maty

Wizyta dostojnego gościa⁹

Najpierw

— malowidło z owocami

⁶ Horio Tatewaki 堀尾帶刀, właśc. Horio Yoshiharu 堀尾吉晴 (1543-1611), wojownik, wasal Toyotomiego Hideyoshiego.

⁷ 山田対馬, postać nieznana. Być może nastąpiła pomyłka w zapisie nazwiska i osobą wymienianą tutaj był Yamauchi (lub Yamanouchi) Kazutoyo (1546-1605), namiestnik Tsushimy, wojownik, wasal Ody Nobunagi, później Toyotomiego Hideyoshiego, pierwszy z linii władców księstwa Tosa.

⁸ Sengoku Gombei 仙石権兵衛, właśc. Sengoku Hidehisa 仙石秀久 (1552-1614), wojownik, wasal Toyotomiego Hideyoshiego.

⁹ Była to wizyta Toyotomiego Hideyoshiego.

— na desce pośredniej¹⁰: letnie palenisko *furo* z Temmyō, kociołek – „smok w chmurach”

— słój na herbatę Spokojne Chwile – ustawiony ze względu na wyrażaną od dawna prośbę dostojnego gościa, [naczynie do wstawiania czerpaka:] ze spodem jak u brzoskwini, [naczynie na zużytą wodę:] z wąskim otworem, [podstawka pod pokrywkę:] pieczęć Linji

Koszyk na węgiel: podręczne pudełko, pokrywane laka, zostało wniesione i poprawiono węgiel

△ zupa: z bylicą i siekanymi jarzynami

△ kiszonka w sake

△ solone rybie flaczki

△ potrawa pieczona: małe morlesze i małe *ayu*¹¹

△ potrawa gotowana: *tōfu*

△ skowronki – pieczone

△ czysta zupa: z małżami i młodymi pędami skrzypu

△ słodczyce: kotewki, grzyby *shiitake*, kasztany

Później

— Po słoju wystawiono wazon na kwiaty z szerokim otworem, na kwadratowej tacy ze ściankami – irysy i kwiaty brzoskwini. Dostojny gość ułożył tylko irysy.

— na tacy okrągłej od wewnętrznej strony naczynie na herbatę: z okrągłym, płaskim denkiem; czarka „oko niebios” Stolica Nara, bez woreczka; *chashaku* należące do Jōō, *chasen*, *chakin*

Poza tym

— podstawka pod czarkę „oko niebios”: Hotta, wniesiona

— lekka herbata — przyrządzona przez dostojnego gościa

¹⁰ Jap. *nakaita* 中板, deska o szerokości jednego *shaku* i czterech *sun* (ok. 42 cm) jeden z elementów budowy *chashitsu*, wstawiana w podłogę pomiędzy matą, na której siedzi gospodarz, a matą, na której siedzą goście; stosowana np. w pokojach wielkości *nijōdai* (dwóch mat i trzeciej skróconej), *sanjō* (trzech mat), *sanjōdai* (trzech mat i jednej skróconej) i podobnych, w celu powiększenia przestrzeni pokoju.

¹¹ Jap. *ayu*, łac. *Plecoglossus altivelis altivelis*, ang. *sweetfish*, ryba z rzędu łososi, rodziny *Plecoglossus*, brak polskiej nazwy.

29. *Sangatsu misoka Hiru*

三月晦日 昼

Trzydziesty dzień trzeciego miesiąca
W dzień

W pokoju wielkości dwóch mat
Yoshimune z Bungo¹², Tahara Shiro¹³, Ryōju

Najpierw

— kaligrafia Dongyu

— na dużej desce¹⁴: letnie palenisko uczernione sadzą¹⁵, kociołek – „smok w chmurach”, uchwyty do kociołka, miotełka z piór

— na półce: węgiel w koszyku na zieleninę

△ zupa: z suszonymi liśćmi i małżami „*sakura*”

△ potrawa z octem

△ pasta rybna na patyczku, węgorz

△ sałatka

△ sucharki ryżowe, prażone nasionka czwórczaka, grzyby *shiitake*

Później

— zwój z wneki został zwinięty, w długiej tykwie – kwiaty glicynii¹⁶

— duża deska: tak jak było; czerpak, podstawka pod pokrywkę: ucięta z bambusa

— naczynie na zimną wodę: w kształcie ziemniaka¹⁷

¹² Właśc. Ōtomo Yoshimune 大友義統 (1558-1605), wojownik, wasal Toyotomiego Hideyoshiego, w 1587 r. przyjął chrześcijaństwo; studiował drogę herbaty i znane są zapiski o tym, iż brał udział w spotkaniach herbacianych Rikyū, Imaiego Sōkyū i in.

¹³ 田原四郎, postać nieznana skądinąd.

¹⁴ Jap. *ōita* 大板, rodzaj deski *shikiita* 敷板, podkładanej pod letnie palenisko, z drewna czasem pokrywanego laką; *ōita* ma długość jednego *shaku* i czterech *sun* (ok. 42 cm) na jedno *shaku* i dwa *sun* (ok. 36 cm) lub kwadratu o boku jednego *shaku* i czterech *sun*.

¹⁵ Jap. *yuenburo* 油煙風炉, letnie palenisko wykonane z ceramiki i zabarwione na czarno sadzą uzyskaną ze spalonego tłuszczu lub żywicy.

¹⁶ Jap. *fuyi* 藤, łac. *Wisteria floribunda*, pol. glicynia kwiecista.

¹⁷ Jap. *imogashira* 芋ガシラ, kształt np. naczynia na zimną wodę lub *chaire*, na herbatę, przypominający bulwę *satoimo*, czyli pochryznu, tzn. o zwężonym, zaokrąglonym czubku i rozszerzającym się niżej.

- naczynie na herbatę: na okrągłej, płaskiej podstawie
- czarka: czarna

30. *Shigatsu tsuitachi Asa*

四月朔日 朝

Pierwszy dzień czwartego miesiąca
Rankiem

W pokoju wielkości trzech mat
Kobayakawa Takakage¹⁸, sekretarz Kikkawa¹⁹

Najpierw

- kaczki koszyk zawieszony, kwiaty żylistka
- na małej desce²⁰: letnie palenisko, kociołek — „smok w chmurach”
- na półce: naczynko na kadzidło, miotelka z piór

△ zupa: z suszonymi łądygami pochrzynu i *sasage*²¹

△ przepiórka: duszona w sake

△ czarne wodorosty

△ sałatka

△ prażone nasionka czwórczaka, grzyby *kawatake*

Później

- kaligrafia Yu Liao’ana
- (naczynie na herbatę:) o szerokim spodzie, na tacy
- czarka: nowa ceramika *seto*
- naczynie na zimną wodę: ceramika *shigaraki*
- na półce: czerpak, podstawa pod pokrywkę

¹⁸ Kobayakawa Takakage 小早川隆景 (1533-1597), wojownik, wasal Hideyoshiego, przez pewien czas jeden z tzw. „pięciu starszych” Hideyoshiego, posiadał duże włości w prowincji Echizen.

¹⁹ Właśc. Kikkawa Hiroie 吉川広家 (1561-1625), wojownik, wasal Hideyoshiego.

²⁰ Jap. *koita* 小板, deska podkładana pod letnie palenisko *furo*, o wymiarach dziewięciu *sun* i czterech *bu* (ok. 29 cm) na dziewięć *sun* i dwa *bu* (ok. 28 cm), grubości sześciu *bu* (1,8 cm).

²¹ Jap. *sasage*, łac. *Dumasia truncata*, roślina strączkowa z rodziny *Leguminosae*, czyli motylkowatych, z rodzaju *Dumasia*, brak polskiej nazwy.

Poza tym
— naczynie na zużytą wodę: metalowe

31. *Dōjitsu Yoru*

同日 夜

Tego samego dnia Nocą

W pokoju wielkości dwóch mat
Tylko Terumoto²²

Najpierw

- malowidło Mokuana²³ z jego kaligrafią: Hanshan i Shide²⁴
- lampka oliwna, zawieszona
- na półce: naczynko na kadzidło – z wróbelkiem, miotłka z piór
- letnie palenisko, kociołek: te same, co rano

△ zupa: z żurawiem

△ potrawa z octem

△ czarne wodorosty

△ ryżowe ciasteczka²⁵, grzyby *kawatake*

²² Właśc. Mōri Terumoto 毛利輝元 (1553-1625), wojownik, jeden z tzw. „pięciu starszych” Hideyoshiego.

²³ Mokuan Reien 牧庵靈淵 (?-ok. 1345), japoński mnich zen, malarz, w latach 20-tych XIV w. udał się do Chin, gdzie oprócz praktyki zen studiował także malarstwo tuszem; odznaczył się takim talentem, że nazywano go wcieleniem Mokkeia i uznawano, iż przewyższył chińskich mistrzów w malarstwie *dōshakuga*, przedstawiającym postaci bóstw taoistycznych i buddów.

²⁴ Hanshan, jap. Kanzan 寒山, i Shide, jap. Jittoku 拾得, dwaj mnisi, mieli żyć w czasach dynastii Tang (jap. Tō 唐, 618-907) i mieszkać u stóp góry Tiantai (jap. Tendai), oddając się praktyce pod kierunkiem mistrza Fenggana (jap. Bukan 豐干), uważani za wcielenia bodhisattwów Mañjuśrī i Samantabhadry; Hanshan pozostawił zbiór wierszy. Ich oderwane od codziennych trosk życie inspirowało poetów i malarzy: często przedstawiani są razem, zwykle Hanshan z rozwiniętym zwojem sutry, zaś Shide z miotłą w ręku.

²⁵ Jap. *okoshigome* フコシ米, rodzaj ciastek zrobionych z podgrzanego ryżu, prosa, orzeszków ziemnych itp., wymieszanych z rozgrzanym syropem cukrowym i wystudzonych następnie w foremkach.

Później

- w dużym koszyku kwiaty żylistka²⁶
- na półce: czerpak, podstawka pod pokrywkę: ucięta z bambusa
- naczynie na zimną wodę: ceramika *shigaraki*
- naczynie na herbatę: z szerokim spodem

Poza tym

- czarka: czarna, przęgowana
- naczynie na zużytą wodę: „przyniesione przez monsuny”²⁷

32. *Shigatsu itsuka Akatsuki yori*

四月五日 暁より

Piąty dzień czwartego miesiąca
Od świtu

W pokoju wielkości dwóch mat
Rządca Ono²⁸, Takeda Sakichi²⁹

Najpierw

- kaligrafia Yu Liao’ana
- na małej desce: letnie palenisko, kociótek – tak jak wyżej
- na półce: węgiel – w koszyku na zieleninę, skrzyneczka na kadzidło, miotełka z piór
- lampion

△ zupa: z żurawiem

△ kiszonka w sake

△ czarne wodorosty

²⁶ Jap. *unohana* 卯の花, łac. *Deutzia crenata*, roślina z rodzaju żylistków.

²⁷ Jedno z kilku, znanych też z innych zapisków, spotkań Rikyū, w których brał udział tylko jeden gość. Jak sugeruje Kumakura Isao, op. cit., str. 131-2, Rikyū mógł zawiesić w pierwszej części spotkania malowidło przedstawiające Hanshana i Shide z myślą o tym, że oto on i jego gość będą zajmować się herbatą w podobnym oderwaniu od doczesnego świata, jak postaci na zwoju. W tej atmosferze skromności i oderwania pojawiają się jednak i tak wykwiłtne elementy jak zupa z mięsem żurawia, podawana zwykle przy większych spotkaniach.

²⁸ Jap. Ono Kemmotsu 小野監物, postać nieznana.

²⁹ Takeda Sakichi 武田佐吉 (XVI w.), wojownik, studiował herbatę u uczniów Takeno Jōō.

- △ słuchotki opiekane na rożenkach
- △ słodocze: prażone nasionka czwórczaka, czarna fasolka

Później

- irysy w kawałku bambusa
- naczynie na herbatę: Najpiękniejsze na Świecie
- miotłka z piór
- czarka: czarna, bambusowe *bambusowe*
- naczynie na zimną wodę: ceramika *bizen*

33. *Shigatsu yōka* Asa

四月八日 朝

Ósmy dzień czwartego miesiąca

Rankiem

Szlachetny pan Arima³⁰

W pokoju wielkości czterech i pół maty

Najpierw

- malowidło Mokuana z jego kaligrafią
- na dużej desce: koreańskie letnie palenisko, kociołek – „smok w chmurach”
- naczynko na kadzidło
- miotłka z piór

△ zupa: z pędami bambusa i lepieźnika³¹

△ potrawa schłodzona

△ sałatka

△ czarne wodorosty

△ sucharki ryżowe, grzyby *shiitake*

Później

- wnąka: tak jak było, piwonia w wazonie o szerokim otworze

³⁰ Być może chodzi tutaj o Arimę Noriyoriego 有馬則頼 (1533-1602), wojownika, który później został jednym z grupy *otogishū*, osób zapewniających towarzystwo Hideyoshiemu.

³¹ Jap. *fuki*, łac. *Petasites japonicus*, pol. lepieźnik, roślina o długiej, jadalnej łodydze.

- naczynie na herbatę: małe *natsume*
- czarka: Daleka Plaża, bambusowe *chashaku*
- naczynie na zimną wodę: kwadratowy cebrzyk Woda ze Studni Tsumbo³²

34. *Shigatsu jūsannichi Asa*

四月十三日 朝

Trzynasty dzień czwartego miesiąca

Rankiem

W pokoju wielkości czterech i pół maty

zarządca Tsushimy³³, porucznik gwardii Yanagawa³⁴, Sōgyū

Wszelkie dekoracje i ustawienie sprzętów tak samo jak poprzednio, ósmego dnia

Posiłek: ryby

— naczynie na zimną wodę: ceramika *shigaraki*

35. *Shigatsu nijūshichinichi Hiru*

四月廿七日 昼

Dwudziesty siódmy dzień czwartego miesiąca

W dzień

W pokoju wielkości dwóch mat

tylko sam Sōmu

Najpierw

— jednowersowa kaligrafia Kokeia

— na półce: naczynko na kadzidło, z wróbelkiem, ustawione samo; miotełka z piór

— na małej desce: letnie palenisko, mały kociołek z paulownią

△ zupa: z siekanymi jarzynami

△ przepiórki na glinianych talerzykach, pieprz z żółtodrzewu

³² Znaczenie nazwy niejasne.

³³ Niejasne, może odnosić się do Sō Yoshitoshiego 宗義智 (1568-1615), *daimyō* wyspy Tsushima; ród Sō najpierw dziedziczył urząd namiestnika, później zaś władzę *daimyō* nad domeną Tsushima.

³⁴ Niejasne, być może chodzi o Yanagawę Shigenobu 柳川調信 (1539-1605), który był wasalem Sō Yoshitoshiego i w jego imieniu służył Hideyoshiemu.

△ młode pędy bambusa gotowane z dodatkami

△ sucharki ryżowe, czarna fasolka

— piwonia w koszyku; uwaga: kwiaty ułożył Sōmu

— naczynie na herbatę: czarne

— czarka: ceramika *mishima*, głęboka

— naczynie na zimną wodę: ceramika *shigaraki*

36. *Gogatsu yokka Hiru Uchū*

五月四日 昼 雨中

Czwarty dzień piątego miesiąca

W dzień

W czasie deszczu

W pokoju wielkości trzech mat

Doradca cesarski z Bizen, Konishi, Sōun

Najpierw

— kaligrafia Yu Liao'ana

— „smok w chmurach”, mała deska do letniego paleniska

— na półce uchwyty do kociołka, miotełka z piór

Później

— wnęka: tak jak było

— naczynie na herbatę: w kształcie stojącego bębena

— czarka: czarna, Kosaciec³⁵

— naczynie na zimną wodę: tegoroczna ceramika *seto*

37. *Gogatsu tōka Hiru Uchū*

五月十日 昼 雨中

Dziesiąty dzień piątego miesiąca

W dzień

W czasie deszczu

³⁵ Jap. *Ayame*, słynna czarka z czarnej ceramiki raku, wykonana przez Raku Chōjirō. w duchu *wabi*; w kształcie była lekko zaokrąglona, z delikatnie stulonymi krawędziami, zaś czarne szkliwo miało lekko przyblakły kolor.

W pokoju wielkości trzech mat
Naitō Hizen³⁶, Tōsa, Gorōu³⁷

I najpierw, i później tak jak poprzednio, czwartego dnia

38. *Gogatsu jūkunichi*

五月十九日

Dziewiętnasty dzień piątego miesiąca

W pokoju wielkości dwóch mat

Amano Hikou, Tsuda Satarō, Ueda Hayato³⁸

I najpierw, i później tak jak poprzednio, dziesiątego dnia, z tym że naczynie na herbatę było z szerokim spodem.

39. *Gogatsu nijūrokunichi Asameshi go*

五月廿六日 朝飯後

Dwudziesty szósty dzień piątego miesiąca

Po śniadaniu

W pokoju wielkości dwóch mat

Sōmu, Ryūami³⁹

— kaligrafia Dongyu

— mała deska: letnie palenisko, mały kociołek z paulownią

— na półce: wróbelek, miotełka z piór

△ sucharki ryżowe, kasztany

— naczynie na herbatę: na okrągłej, płaskiej podstawie

— czarka: Długa Podróż, wniesiona

— naczynie na zimną wodę: ceramika *bizen*

— hortensje w kawałku bambusa

³⁶ Jap. Naitō Hizen 内藤肥前, właśc. Naitō Masaaki 内藤雅明, namiestnik Hizen, wasal rodu Takedów, później służył Tokugawie Ieyasu, któremu oddał znaczne usługi.

³⁷ 藤左, 五郎右, niejasne, o które postaci o podobnych imionach tutaj chodzi.

³⁸ Prawdopodobnie zamienione zostały imiona postaci, które w rzeczywistości brzmiały: Tsuda Hayato 津田隼人 i Ueda Satarō 上田佐太郎. Tsuda Hayato służył Nobunadze, a następnie Tokugawie Ieyasu, zaś Ueda Satarō człowiekiem herbaty.

³⁹ Ryūami 立阿弥, o przydomku Iseya, był jednym z uczniów Rikyū.

40. Rokugatsu futsuka Asa

六月二日 朝

Drugi dzień szóstego miesiąca
Rankiem

Wziąłem ze sobą herbatę do świątyni Nanshūji. Skorzystaliśmy z pokoju trzymatowego w układzie głębokim⁴⁰ w Pustelni Gromadzących się Chmur.

- kazanie w sali wykładowej w śnieżny dzień
- letnie palenisko na desce wstawionej z drugiego końca, naczynko na kadzidło, miotełka z piór
- kociołek: „smok w chmurach”, na dużym letnim palenisku

- △ zupa: z siekanymi jarzynami
- △ posiłek z kaszy
- △ sałatka: z młodych pędów bambusa
- △ potrawa gotowana: liście kolcowoju⁴¹
- △ sucharki ryżowe, prażone nasionka czwórczaka

- naczynie na herbatę: małe *natsume*
- czarka: Belkowanie Studzienki
- naczynie na zimną wodę: ceramika *bizen*
- w koszyku kwiaty wilca⁴²

41. Rokugatsu jūsannichi Asa

六月十三日 朝

Trzynasty dzień szóstego miesiąca
Rankiem
Wizyta dostojnego gościa

W pokoju wielkości sześciu mat w dworku w Samegai⁴³

⁴⁰ Jap. *fuka sanjō* 深三畳, zob. przypis 61 w rozdziale I, CZĘŚĆ 1 (*Silva Iaponicarum* 2; 32).

⁴¹ Jap. *kuko*, łac. *Lycium Chinense*, pol. kolcowój chiński.

⁴² Jap. *asagao*, łac. *Ipomoea nil*, pol. wilec, roślina z rodziny powojowatych.

⁴³ Jap. Samegai 醒ヶ井, okolica w południowej części Kioto, obecnie w dzielnicy Shimogyōku, gdzie znajdowała się rezydencja Rikyū. W Samegai znajdowało się

Osoby towarzyszące: Kuroda Kageyu⁴⁴, Yūsai, Sōkyū

Najpierw

— we wnęce: zwój z wierszem ułożonym przez dostojnego gościa⁴⁵, spod jego własnego pędzla

Wiersz brzmiał:

Tylko czerpiąc z głębi serca, które dna nie ma,

Jako człowiek herbaty możesz być znany

Wiersz ten został tym razem zawieszony ze względu na to, że rok wcześniej został ułożony właśnie w tym pokoju.

— na dużej desce letnie palenisko; przy czym, koszyk na węgiel ustawiony wcześniej

— naczynko na kadzidło: wyryte we wzór wirów wodnych

— miotłka z piór

Poza tym

— do ułożenia ognia użyto płaskiego rondla glinianego⁴⁶, „smoka w chmurach” ustawiono jako „mokry kociołek”⁴⁷

△ zupa: z suszonymi liśćmi

△ posiłek z kaszy

źródło stynące z czystej, smacznej wody, cenionej również przez ludzi herbaty i spotkanie to jest właśnie tej wodzie poświęcone; z tego względu umyślnie zawieszony zostaje „mokry kociołek” i woda jest podgrzewana od początku w obecności gości.

⁴⁴ Jap. Kuroda Kageyu 黒田勘解由, właśc. Kuroda Yoshitaka 黒田孝高 (1546-1604), wojownik, chrześcijanin, w 1593 r. przyjął święcenia buddyjskie i przybrał wtedy imię Josui.

⁴⁵ Tutaj przypisany Hideyoshiemu, współcześnie wiersz ten zaliczany jest do tzw. *Rikyū hyakushu* 利休百首 (*Stu strof Rikyū*), zbioru zawierającego około stu wierszy przypisywanych Rikyū, a poświęconych drodze herbaty, zarówno jej istocie i ogólnym regułom, jak i obchodzeniu się z konkretnymi sprzętami. Tekst japoński to: *Sokoi naki kokoro no uchi o kumite koso ochanoyusha to wa shiraretarikeri*.

⁴⁶ Jednym ze sprzętów potrzebnych podczas układania węgla na oczach gości (*sumidema*) jest *haiki* 灰器, czyli „naczynie na popiół”, w którym np. wnoszony jest popiół do dosypywania do paleniska. Tutaj jako takie naczynie zastosowane zostało płaskie naczynie ceramiczne, niepolerowane, zwykle używane do prażenia, pieczenia itp.

⁴⁷ Zob. przypis 54 w rozdziale I, CZĘŚĆ I (Silva Iaponicarum 2: 30).

- △ potrawa z octem
- △ *sashimi: managatsuo*
- △ potrawa gotowana
- △ prażone nasionka czwórczaka, kasztany

— wnąka: tak jak było
 — na krawędzi dużej deski: czerpak, podstawka pod pokrywkę: ucięta z bambusa

Poza tym

- naczynie na zimną wodę: kwadratowy cebrzyk, z wodą ze studni Samegai
- naczynie na herbatę: małe *natsume*
- czarka: Pochewka na Żarnówkę⁴⁸, bambusowe *chashaku*
- naczynie na zużytą wodę: metalowe

Rikyū przyrządził lekką herbatę dla wszystkich: najpierw dla dostojnego gościa, a następnie dla każdej z osób towarzyszących.

Yūsai

*To dzięki temu, iż trwa panowanie bez skazy
 Woda ze skalnej studni może być tak czysta.*⁴⁹

Yoshitaka

*Myślę, że głos tysięcy pokoleń będzie silniejszy jeszcze niż dziś,
 a czysty nurt wody nigdy nie ustanie.*

⁴⁸ Jap. *Hikiki no saya* 引木ノサヤ, słynna czarka, wykonana w Korei, typu *tsutsujawan* 筒茶碗, czyli stosunkowo wysoka i wąska, niczym kubek, przez co miała być podobna do pochewki zakładanej na żarnówkę, czyli drażek lub raczkę mocowaną do żaren (*chausu*, używanych do mielenia herbaty na proszek), tak by można było nimi obracać. Hideyoshi miał ją podarować Rikyū, ten zaś przekazał ją później Hosokawie Sansaiowi (1563-1645, syn Yūsai).

⁴⁹ Oba wiersze przy użyciu gry słów wysławiają głównego gościa, Hideyoshiego, jednocześnie nawiązując do słynnej wody ze studni w Samegai, która była jednym z najważniejszych elementów spotkania tego dnia. W swoim wierszu Yūsai nawiązując do czystości wody z Samegai wysławia szlachetność, czystość rządów Hideyoshiego (tekst japoński: *Nigori naki kono miyo tote ya ashihiki no iwai no mizu mo yasuku sumuran*), zaś Yoshitaka, mówiąc o tym, iż nurt wody z tego źródła nie ustanie, wyraża przekonanie o trwałości rządów Hideyoshiego i jego potomków (tekst japoński: *Yorozuyo no koe mo kyō yori mashimizu no kiyoki nagare wa taeji to zo omou*).

Dostojny gość raczył zażyczyć sobie, by dziś ci dwaj ułożyli wiersze, co też skwapliwie zrobili.

42. *Rokugatsu misoka Shimo Kamogawa hata nite*

六月晦日 下加茂川端にて

Trzydziesty dzień szóstego miesiąca

Na brzegu przy dolnym biegu Kamogawy⁵⁰. Właściwie — przy okazji udawania się wieczorem na oczyszczenie.

Myōhōin, szlachetny pan Hino, Yūsai, Ryōmu⁵¹

- mały kociołek z paulownią zawieszony na ugiętym bambusie
- (naczynie na zimną wodę:) okrągły ceberek cedrowy
- w herbacianej skrzyneczce:
 - naczynie na herbatę: „okrągły flakonik”
 - czarka: ceramika *mishima*, głęboka

△ w przenośnej puszcze: słodycze

43. *Shichigatsu nanoka Saru no toki yori*

七月七日 申ノ時より

Siódmy dzień siódmego miesiąca

Od godziny małpy

W pokoju wielkości czterech i pół maty

Omuro Gosho, szlachetny pan Konoe⁵², Ryōshitsu⁵³, Ryōmu

Najpierw

- w koszyku kwiaty wilców
- mały kociołek z wzorem szpulki nici: na haku

⁵⁰ Jap. Kamogawa 加茂川 („rzeka Kamo”), rzeka przepływająca przez Kioto z północy na południe; na wysokości obecnego pałacu cesarskiego łączy się z nią rzeka Takano, zaś na południe od Kioto Kamogawa łączy się z rzeką Katsura.

⁵¹ 了無, niejasne, o jaką postać chodzi.

⁵² Prawdopodobnie chodzi o Konoe Sakihisę 近衛前久 (1536-1612) lub jego syna Konoe Nobutadę 近衛信伊 (1565-1614), dworzan cesarskich; obaj byli wybitnymi kaligrafami.

⁵³ Właśc. Ishibashi Ryōshitsu 石橋良叱る (?-?), mieszczanin z Sakai, zięć Rikyū.

- na półce „wieżyczka”⁵⁴:
 - wierzch:
 - miotełka z piór
 - dół:
 - naczynie na zimną wodę: w kształcie balii
 - podstawka pod pokrywkę: ucięta z bambusa

Poza tym

△ czysta zupa, sake — dwie kolejki, sucharki ryżowe, prażone nasionka czwórczaka, grzyby *shiitake*

Później, po zapadnięciu nocy

— wnęka: wstawiono wazon na kwiaty, pudełko na arkusze papieru do zapisywania wierszy

— na półce „wieżyczka”:

wierzch:

— na tacy: kadzielnica Smugi Chmur, naczynko na kadzidło — podwójne, wyryte we wzór wirów wodnych, pałeczki do kadzidła

środek:

— czerpak

dół:

— naczynie na zimną wodę: to samo, co przedtem

— podstawka pod pokrywkę: ta sama, co przedtem

— naczynie na herbatę: w kształcie stojącego bębena

— czarka: Strażnik Drzewa⁵⁵

Po zakończeniu herbaty palenie kadzidła

⁵⁴ Jap. *seirōdana* 城楼棚, rodzaj półki, nazwana tak dlatego, że kształtem miała przypominać chińską wieżyczkę, o kwadratowej podstawie i trzech półkach; początkowo używana do wystawiania *karamono* 唐物, czyli ozdobnych przedmiotów sprowadzonych z Chin, później wprowadzona do używania podczas parzenia. Półka ta jest opisana np. w *Nampōroku* w rozdziale *Tana*, czyli *Półka*, gdzie m.in. jest powiedziane, iż jej twórcą jest Tsuda Sōgyū.

⁵⁵ Jap. *Kimamori* 木守, słynna czarka z czerwonej ceramiki raku, wykonana przez Raku Chōjirō, jedna z tzw. *Chōjirō shichishu* 長次郎七種, czyli siedmiu słynnych dzieł Chōjirō; pewnego razu Rikyū miał zamówić u ceramika kilka czarek, które następnie rozdał swoim uczniom, tymczasem ta jedna pozostała u niego, niczym *Kimamori*, czyli owoc, pozostawiony na drzewie w celu zapewnienia sobie dobrych zbiorów w następnym roku, i dlatego też zyskała taką nazwę.

44. *Shichigatsu jūrokunichi Hiru*

七月十六日 昼

Szesnasty dzień siódmego miesiąca

W dzień

W pokoju wielkości dwóch mat

Kimura Hitachi⁵⁶, szlachetny pan Chūzaburō, szlachetny pan Tōgorō⁵⁷

— kaligrafia Dongyu

— „smok w chmurach”

— na półce: naczynko na kadzidło, miotłka z piór

△ zupa: z siekanymi jarzynami

△ *noppei*⁵⁸ ze skowronkami

△ potrawa z octem

△ sałatka

△ prażone nasionka czwórczaka, kasztany

— w wazonie z szerokim otworem: lotos, białe

na półce:

— naczynie na herbatę: czarne, włożone do Dalekiej Plaży

— miotłka z piór

— naczynie na zimną wodę: ceramika *shigaraki*, na nim *chasen*, *chakin*

— na krawędzi dużej deski ułożone bambusowe *chashaku*

⁵⁶ Jap. Kimura Hitachi 木村常陸, właśc. Kimura Hitachinosuke 木村常陸介 (?-1595), wojownik, wasal Hideyoshiego, uczeń Rikyū, zaliczany do z tzw. *Rikyū daisu shichininshū* 利休台子七人衆, czyli siedmiu uczniów Rikyū, którzy posiadli wiedzę o *daisu*.

⁵⁷ Prawdopodobnie chodzi o Terazawę Chūjirō Hirotakę 寺沢忠次郎広高 i Hashibę Tōgorō Hidekazu 羽柴藤五郎秀一, wojowników.

⁵⁸ Jap. *noppei*, rodzaj zupy zagęszczanej mączką ararutową, z gotowanymi jarzynami, takimi jak biała rzodkiew, marchewka, korzeń łopianu, a także grzybami i smażonym *tōfu*; tutaj zawiera także mięso skowronków.

45. Shichigatsu nijūhachinichi Asa

七月廿八日 朝

Dwudziesty ósmy dzień siódmego miesiąca
Rankiem

W pokoju wielkości dwóch mat

Jokyū⁵⁹, Jōsa⁶⁰, Ryōmu

Najpierw

— kaligrafia Yu Liao’ana

A co poza tym, to tak samo jak poprzednio, szesnastego dnia

46. Hachigatsu futsuka Asa

八月二日 朝

Drugi dzień ósmego miesiąca
Rankiem

W pokoju o wielkości dwóch mat
Misa⁶¹, Sōkei

Najpierw

— kaligrafia Kokeia, małymi znakami

— „smok w chmurach”, na małym letnim palenisku

— na półce: miotełka z piór, naczynko na kadzidło

△ zupa: z siekanymi jarzynami

△ uformowany ryż

△ ryba *hae*⁶²

△ potrawa gotowana: grzyby *matsutake*⁶³

△ sucharki ryżowe, kasztany

⁵⁹ 如休, niejasne, o jaką postać chodzi.

⁶⁰ Właśc. Aburaya Jōsa 油屋常佐 (?-?), mieszczanin z Sakai.

⁶¹ Prawdopodobnie skrót od imienia Misaburō 弥三郎, ale nie jest jasne, o jaką postać o tym imieniu chodzi.

⁶² Jap. *hae* 鱈, łac. *Zacco platypus*, brak polskiej nazwy, ryba z rzędu karpiowatych.

⁶³ Jap. *matsutake* 松茸, łac. *Tricholoma matsutake*, grzyb z rodzaju gąsek.

— wazon z kawałka bambusa
— na półce: tylko sama podstawka pod pokrywkę — pieczęć Linji
— naczynie na herbatę: małe *natsume*
— czarka: Pochewka na Żarnówkę
[uwaga naniesiona cynobrem:] czarka wniesiona
— naczynie na zimną wodę: ceramika *shigaraki*, na wierzchu czerpak

47. *Hachigatsu tōka* Asa

八月十日 朝

Dziesiąty dzień ósmego miesiąca
Rankiem

W pokoju wielkości dwóch mat
Maki Heita⁶⁴, rządcą Shiba⁶⁵

Wszystko tak jak poprzednio, drugiego dnia

48. *Hachigatsu nijūgonichi* Hiru

八月廿五日 昼

Dwudziesty piąty dzień ósmego miesiąca
W dzień

Na zaproszenie Sōkyū wzięłem ze sobą herbatę do niego.

W pokoju wielkości czterech i pół maty
Yakushiin⁶⁶, Fujishige⁶⁷, Ryōju, Sōhon⁶⁸

⁶⁴ Jap. Maki Heita 牧兵太, właśc. Makimura Toshisada 牧村利貞 (1545-1593), wojownik, jeden z tzw. *Rikyū shichitetsu* 利休七哲, czyli siedmiu mędrców Rikyū.

⁶⁵ Właśc. Shibayama Shun'ichi 芝山俊一 (?-?), wojownik, znany jako Shibayama kemmotsu 芝山監物, czyli rządcą Shibayama, jeden z *Rikyū shichitetsu*.

⁶⁶ Jap. Yakushiin 薬師院, prawdopodobnie chodzi o lekarza Takedę Enshina 武田円璣, który pochodził ze znanego rodu lekarzy z Sakai; nadany przez cesarza Gokashiwara jednemu z jego przodków przydomek Yakushiin był dziedziczony w rodzie. Takeda Enshin był członkiem herbaty, aktywnym w ostatnich dekadach XVI w., zięciem Kitamukiego Dōchina.

⁶⁷ Właśc. Fujishige Tōgen 藤重藤元 (?-?), mistrz-wytwórca przedmiotów z laki, wraz z synem, również Tōgenem, po zdobyciu i spaleniu zamku w Osace w 1615 r. przez siły shōgunatu, na zlecenie Tokugawy Ieyasu naprawiał wydobyte z gruzów cenne sprzęty

Najpierw

— kaligrafia Yuanwu, przyniesiona na prośbę, wystawiona we wnęce zwinięta, z tytułem na wierzchu⁶⁹

— na małej desce: letnie palenisko, kociótek „smok w chmurach”

△ zupa: z siekanymi jarzynami

△ pieczone bekasy, pasta rybna na patyczkach

△ kiszonka małosolna

△ sucharki ryżowe, pieczone kasztany

Później

— wnąka: tak jak było

— naczynie na zimną wodę: ceramika *shigaraki*, na wierzchu czerpak

Na półce:

— przenośne pudełko na herbatę; a dokładniej, w nim naczynie na herbatę z szerokim spodem, małe *natsume*

— miotłka z piór

Poza tym

— czarka: czarna, bambusowe *chashaku*

49. *Kugatsu futsuka Hiru*

九月二日 昼

Drugi dzień dziewiątego miesiąca

W dzień

herbaciane, przez co znacznie przysłużył się Ieyasu.

⁶⁸ Jap. Sōhon 宗本, niejasne, być może chodzi tutaj o postać kupca z Sakai i człowieka herbaty zw. Notoya, który był także członkiem *kaigōshū*, czyli samorządu miasta Sakai.

⁶⁹ Tak zwane *gedai kazari* 外題荘 polegało na dekoracyjnym ułożeniu zwiniętego zwoju w tokonomie tak, by widoczny był *gedai*, czyli tytuł naklejony na spodniej stronie zwoju, zawierający np. tytuł, imię twórcy, ewentualnie ocenę itp; robiono tak w przypadku ekspozycji np. listów cesarskich, szczególnie cennych zwojów i in. Wiadomo, iż w czasach ósmego shōguna, Ashikagi Yoshimasy, jego *dōbōshū*, czyli kompanionowie, tacy jak Nōami, opatrywali takimi *gedai*, zgodnymi z ustalonymi regułami, najcenniejsze zwoje należące do kolekcji shōguna, i stąd może wywodzić się *gedai kazari*. W *Nampōroku* jest ono opisane w rozdziale *Metsugo*, czyli *Po śmierci*, we fragmencie „*Toko ni gedai aru kakemono...*” („Zwoje, opatrzone zewnętrznymi tytułami, w tokonomie...”).

W pokoju wielkości dwóch mat
Konishi — zarządca Settsu, Sōmu

Najpierw

- kaligrafia Yu Liao'ana
- kociołek: z wzorem padającego gradu
- na półce: naczynko na kadzidło, miotłka z piór

- △ zupa: z małymi rzepkami
- △ słuchotki opiekane na rożenkach, czarne wodorosty
- △ pasta miso z aromatem *yuzu*, pieprz z żółtodrzewu
- △ sucharki ryżowe, grzyby *kawatake*

Później

- wnęka: nadal zwój, przed nim wazon na kwiaty z wąskim otworem, jedna gałązka chryzantemy
- naczynie na herbatę: czarne, „ucięte w połowie”,⁷⁰
- czarka: Daleka Plaża
- naczynie na zimną wodę: ceramika *shigaraki*, z uszkami

50. *Dōya*

同夜

Tego samego dnia, nocą
W pokoju wielkości dwóch mat
Sōkyū, Jōrin

Najpierw tak jak poprzednio, powyżej

- △ zupa: z suszonymi liśćmi i siekanymi jarzynami
- △ tuńczyk⁷¹ z kiszonymi śliwkami
- △ potrawa z octem: o smaku *yuzu*

⁷⁰Jap. *hangiri* 半切, jeden z kształtów *chaire*, czyli naczyń na herbatę: naczynie stosunkowo niskie, płaskie i lekko spłaszczone, mające w połowie linię przedzielającą je, stąd nazwa *hangiri*.

⁷¹Jap. *katsuo*, łac. *Katsuwonus pelamis* syn. *Euthynnus pelamis*, pol. tuńczyk bonito, mały, także pelamida, sarda, ryba z rodziny makrełowatych.

△ *funoyaki*, grzyby *shiitake*

Później

— naczynie na herbatę: Sosnowe Wzgórze, okrągła taca

Poza tym tak jak poprzednio, powyżej

51. Kugatsu jūsannichi Hiru

九月十三日 昼

Trzynasty dzień dziewiątego miesiąca

W dzień

Wizyta dostojnego gościa⁷²

Otwarcie słoja⁷³

W pokoju wielkości dwóch mat

Najpierw

— portret mistrza zen Linji

— kociołek: w nitki

— na półce: uchwyty do kociołka, miotełka z piór

△ zupa: z siekanymi jarzynami

△ gęś z piestrówkami⁷⁴

△ pasta miso z aromatem *yuzu*

△ *funoyaki*, grzyby *kawatake*

— w wazonie o szerokim otworze: jeden kwiat chryzantemy

— na półce: (naczynie na herbatę) „okrągły flakonik”, na czworobocznej tacy

— naczynie na zimną wodę: ceramika *shigaraki*

— czerpak, podstawka pod pokrywkę: ucięta z bambusa

Poza tym

— czarka: Daleka Plaża

⁷² Była to wizyta Hideyoshiego.

⁷³ Jap. *kuchikiri* 口切, zob. przypis 20 w rozdziale I, CZĘŚĆ 2 (*Silva Iaponicarum* 3: 37).

⁷⁴ Jap. *shōro* 松露, łac. *Rhizopogon rubescens*, pol. piestrówka.

Po herbacie dostojny gość ułożył węgiel w palenisku

52. *Dōya*

同夜

Tego samego dnia, nocą

W pokoju wielkości dwóch mat

Nambō, Ryōmu, Sōun

Najpierw

- malowidło: kasztany i persymony, pędzla Mokkeia
- na półce: naczynko na kadzidło, miotelka z piór
- kociołek: z wzorem szpulki nici
- zawieszona lampka oliwna

△ zupa: z siekanymi jarzynami

△ potrawa z octem: o smaku *yuzu*

△ czarne wodorosty

△ grzyby *kawatake*

Później

- wnąka: tak jak było
- naczynie na herbatę: „okrągły flakonik”, na tacy
- naczynie na zimną wodę: Pęknięty Ceberek⁷⁵
- na półce: czerpak, podstawa pod pokrywkę: ucięta z bambusa

53. *Kugatsu nijūshichinichi*

九月廿七日

Dwudziesty szósty dzień dziewiątego miesiąca

Terumoto, Sōmu, Sōun

Wszystko tak samo jak poprzednio, drugiego dnia, nocą

⁷⁵ Jap. *Yabureoke* ヤブレ桶, nazwa słynnego naczynia z ceramiki *bizen*, o charakterystycznym, prostym kształcie ceberka z obręczą przytrzymującą klepki, ulubionego przez Rikyū; później miało stać się własnością rodu Maeda.

54. Kugatsu nijūshichinichi Hiru

九月廿七日 昼

Dwudziesty siódmy dzień dziewiątego miesiąca

W dzień

Kunai⁷⁶, Kakuho⁷⁷

Wszystko tak samo jak poprzednio, dwudziestego szóstego dnia

55. Kugatsu nijūhachinichi Asa

九月廿八日 朝

Dwudziesty ósmy dzień dziewiątego miesiąca

Rankiem

Dōkei⁷⁸, Shioya Jizaemon⁷⁹

Wszystko tak samo jak poprzednio, dwudziestego szóstego dnia

56. Kugatsu nijūkunichi Akatsuki yori

九月廿九日 暁より

Dwudziesty dziewiąty dzień dziewiątego miesiąca

Od świtu

W pokoju wielkości dwóch mat

Mistrz Shōrei, na pierwszym miejscu, Oribe

Najpierw

— portret Linji

— kociołek: z wzorem szpulki nici

— lampion

⁷⁶ Jap. Kunai 宮内, prawdopodobnie chodzi o postać Matsui Yūkana 松井友閑 (?-?), który nosił tytuł *kunai kyō*, czyli wysokiego urzędnika do spraw dworu cesarskiego, na służbie u Ody Nobunagi, a następnie Hideyoshiego; Matsui był także znanym człowiekiem herbaty.

⁷⁷ 覚法, postać nieznaną.

⁷⁸ Przypuszcza się, iż Dōkei 道慶 był bratem drugiej żony Rikyū, znanej pod imieniem buddyjskim Sōon 宗恩, uczniem Rikyū i człowiekiem herbaty, a później także mężem kuzynki Rikyū

⁷⁹ Shioya Jizaemon 塩ヤ次左衛門 (?-?), kupiec z Sakai i człowiek herbaty.

— na półce: naczynko na kadzidło, miotłka z piór

△ zupa: z siekanymi jarzynami

△ *tōfu*

△ czarne wodorosty

△ sałatka: z grzybami *matsutake*

△ *funoyaki*, grzyby *kawatake*

— chryzantema w kawałku bambusa

— na półce: naczynie na herbatę – małe *natsume*, miotłka z piór

— (czarka:) Stolica Nara, podstawka: Hotta

— naczynie na zimną wodę: ceramika *shigaraki*, na wierzchu czerpak

Poza tym

— czarka na zmianę: ze śladem pociągnięcia pędzlem, bambusowe *chashaku*

— naczynie na zużytą wodę: z wygiętego kawałka drewna, podstawka pod pokrywkę: ucięta z bambusa

Powyższe wybrałem spośród zapisków w dzienniku, który pożyczyłem. Jeśli znalazłyby się omyłki, pokornie proszę o dopisanie bądź skreślenie.

Z szacunkiem

Piątego dnia jedenastego miesiąca

Nambō

Tu pieczęć

Własnym pędzlem Rikyū

W powyższym nie ma omyłek. Pewne miejsca, które powinny znaleźć się w przekazach ustnych, zaznaczyłem cynobrem. Przy tej sposobności powiem też co następuje. Nie mogę pojąć tego, że spośród spotkań tegorocznych zostały wybrane tylko te, podczas których użyto jakichś odmiennych sprzętów. Chciałbym osobiście zapytać autora o jego zamysł. Każdego dnia robię tak samo, z pewnością nie dążąc do zmian, a w tym wszystkim to, co dokonuje się w sercu, zmienia się i może przyjąć dowolną postać. Nie sprawi przyjemności sercu takie spotkanie, podczas którego zachowanie, ozdoby czy ustawienie sprzętów są niezwykłe.

Z szacunkiem

Sōeki

Tu pieczęć

do Nambō

Powyższe sprawdziłem z kopią należącą do rodu⁸⁰ i stwierdzam, że nie ma omyłek.

Drugi rok ery Hōei⁸¹, dzień Młodszeo Brata Koguta, w ostatnim miesiącu roku

Jitsuzan (pieczęć cynobrowa)
<Koniec Rozdziału II>

⁸⁰ Por. wyjaśnienia Sōkeia na końcu rozdziału *Oboegaki*, czyli *Spisane z pamięci*, CZĘŚĆ 2 (*Silva Iaponicarum* 3; 47): „Kopia należąca do rodu oznacza kopię, którą sporządził i miał w swoim posiadaniu Jitsuzan”.

⁸¹ Czyli rok 1705 A.D.

Kyoko Nakanishi

Contrastive Analysis of Hearer's Behavior in Japanese and Polish Conversation (continuation)

The studies on Japanese language reveal that in Japanese dialogue the role of a hearer is very important for smooth progress of the conversation. Hence, it is important to adjust the guidance in teaching Japanese conversation not only to the speaker but also to the hearer's skills. In this paper I present a comparative analysis of the differences between the conversations of native speakers of Japanese and Polish using the natural speech data.

Anna Zalewska

***Nampōroku, czyli Zapiski z południowych stron*
rozdział II Kai, czyli Spotkania
Nampōroku, or Records from the South
volume II Kai, or *The Gatherings***

This paper, being a continuation of the translation of *Oboegaki*, the opening volume of *Nampōroku*, published in 2nd and 3rd vol. of *Silva Iaponicarum* (Winter 2004 and Spring 2005), is a first Polish translation of *Kai*, or *The Gatherings*, its second volume. While *Oboegaki* can be called an introduction or an outline of the philosophy of the way of tea, as understood by Sen no Rikyū, *Kai* has quite different character, being a specimen of so called *chakaiki*, or tea gathering records.

In general, Japanese *chajin*, or tea practitioners, used to keep short recordings of tea gatherings they organized or they took part in, writing down first of all names of famous tea utensils used on the occasion, and also of all other utensils and flowers, dates and names of parties present, weather during the meeting etc.

Kai has a form of an extract from Rikyū's *chakaiki* of one year, containing records of 56 gatherings from the 1st of October to 29th of September next year, but it is difficult to determine the exact year of the records. There is also a theory that *Kai* contains material from a few different years, compiled into one unity.

Chakaiki are considered to be a very valuable source for studying the history of Japanese culture. As to the *Kai*, it also gives us a possibility to try to see in what way the ideals of tea, described in the first volume of *Nampōroku*, were realized. When we read the description of a gathering and try to imagine chosen with great care utensils etc, we can almost see with our own eyes the dealings between the host and the guests and we can feel the atmosphere of the gathering.

中西恭子

聞き手の言語行動に関する日本語会話とポーランド語会話の比較分析（続稿）

従来の日本語研究の成果により、日本語会話においては、聞き手の役割が円滑な談話進行に大きな役割を果たしていることが明らかになっている。すなわち、日本語の会話教育では、話し手になる技術だけでなく、聞き手になる技術を育成するための然るべき指導も重要である。本稿は、日本語母語話者の会話とポーランド語母語話者の会話では、聞き手の言語行動がどのように違うかを、自然談話資料を基に比較分析したものである。

アンナ・ザレフスカ

『南方録』 巻第二 「会」 （ポーランド語訳）

本稿は、『日林』の第2・第3号（2004年冬号・2005年春号）に発表した『南方録』の冒頭巻「覚書」のポーランド語訳の続編にあたる、第二巻「会」の初めてのポーランド語訳である。「覚書」は千利休が考えた茶道の入門または総論であるのに対して、「会」は茶会記の一例であり、「覚書」とはかなり性格を異にする。

日本の茶人には、かねてより、自分で催した、または自分が参加した茶会の略した記録をする習わしがあり、その機会に使われた名物の銘や、その他の道具や花や懐石料理やその日の天気など、また会の日付や参加者の名前を書き記した。

「会」は、利休の1年間の茶会記からの抜き書きの形を取り、10月1日から次の年の9月29日までの56回の茶会の記録を含むが、何年の記録かは、現在では決め難い。何年かの記録を一つに編集したものだという説もある。

茶会記は、日本の文化に関するとても貴重な史料と考えられている。特に「会」からは、『南方録』の第一巻で描写された茶の湯の理想がどんな形で実現されていたかをうかがうことができるものであろう。茶会の記録を読み、丁寧に選ばれた道具などを想像すると、亭

主と客の交わりの様子とその会の雰囲気がおのずと目の前に浮かんでくる。

AUTORZY / CONTRIBUTORS / 投稿者

Kyoko Nakanishi

A lecturer of Japanese at The Department of Japanese Studies, The Institute of Oriental Studies, Adam Mickiewicz University (AMU). She was sent to Poland as a volunteer by Japan International Cooperation Agency (JICA). After three years of working for JICA, she received the present position at UAM. She is in charge of classes of Japanese conversation, mainly for beginners. She obtained her M.A. at the Japanology Department, AMU in 2004, presenting a comparative study of Japanese and Polish conversations as her master's thesis. Her specialty is Japanese-Language Education and Japanese-Language Studies. Currently her interests focus on Conversation Analysis and Teaching Conversation Skills.

Anna Zalewska

M.A. at the Department of Japanese Studies, Warsaw University in 1995. 2001-2004 attended a Ph.D. course at Kyoto University. Specializes in Japanese mediaeval Buddhist literature. Recently published "Knowledge and wisdom in Muju's works," *Kokugo kokubun* 2004-3. Currently is working on her Ph.D. on Muju (1226-1312), priest and author of *setsuwa* stories, and his treatise of *Shōzaishū*, or *Collection of Sacred Assets*.

中西恭子

アダム・ミツケヴィッチ大学東洋学研究所日本学専攻日本語講師。日本国際協力機構の青年海外協力隊事業により上記校に派遣され、3年間の勤務の後、常勤講師として就職、現在は主に初級者を対象に日本語演習の授業を担当している。2004年、日本語会話とポーランド語会話の比較研究を修士論文として提出し、本校日本研究科修士課程を卒業。日本語教育学、日本語学専攻。主たる研究分野は会話分析、会話教育である。

アンナ・ザレフスカ

1995年、ワルシャワ大学日本学科にて修士号取得。2001-2004年、京都大学博士後期課程に在学。専攻は日本の中世仏教文学。最新の論考に、「無住の著作における『多聞』と『智恵』」（『国語国文』2004年3月号）がある。現在、説話集などを著した無住禅師（1226-1312）とその著作『聖財集』を主題にした博士論文を執筆中。

PRACE NADSYŁANE / FOR CONTRIBUTORS / 投稿

1. Przyjmujemy niepublikowane gdzie indziej dokumenty w formacie MS Word, w objętości do ok. 40 000 znaków z włączeniem spacji. Wymagany język dokumentów do publikacji to angielski lub japoński. W innych językach przyjmowane są wyłącznie tłumaczenia japońskich tekstów.

2. Prosimy dostosować transkrypcję wyrazów japońskich do standardu Hepburna lub Kunrei, przy użyciu dostępnych czcionek. Transkrypcja wyrazów niejapońskich powinna być zgodna ze standardem *de facto* dla danego języka. Redakcja może zasugerować zmianę systemu transkrypcji tekstu.

3. Przypisy powinny znajdować się na dole strony.

4. Do tekstu głównego powinno zostać załączone krótkie streszczenie oraz informacja o autorze w języku angielskim i japońskim.

5. Komitet redakcyjny decyduje o dopuszczeniu tekstu do publikacji i powiadamia o tym fakcie autora.

6. Nadesłanie tekstu oznacza zgodę na jego publikację drukiem i na wprowadzenie do tekstu niezbędnych zmian edytorskich.

7. Teksty prosimy nadsyłać jednocześnie pocztą elektroniczną (wersja elektroniczna) oraz pocztą klasyczną (w formie drukowanej) na następujące adresy:

1. We accept documents unpublished elsewhere in MS Word format, not longer than 40 000 characters including spaces.

Documents should be in English or Japanese. Only translations from Japanese may be accepted in other languages.

2. Use available fonts to adjust the romanization of to the Hepburn or Kunrei standard. Words other than Japanese should be romanized according to the *de facto* standard for a given language. We may recommend the change of romanization system.

3. Footnotes should be included on the bottom of the page.

4. Main text should come with short summary and information on the contributor in English and Japanese.

5. The editorial board qualifies a text for publication and notifies the author of this fact.

6. It is understood that by submitting the text the contributors give their consent to its publication in print and to making necessary editorial changes.

7. We await both your e-mail (computer file) and snail mail (printed version) contributions at:

1. MS Word を用いて書かれた 4 万字以内の未刊行の文章を受領する。用いられるべき言語は英語または日本語である。ただし、日本語テキストからの翻訳については、他言語の文章も受領される。

2. 日本語語彙のローマ字表記は、ヘボン式または訓令式とし標準フォントを使用すること。日本語以外の語彙のローマ字表記は、各言語の標準に従う。編集委員会は、ローマ字表記規則の変更を求める場合もある。

3. 注釈はページ下に載せる。

4. 本文に要約と著者紹介を英語と日本語で付記すること。

5. 編集委員会は、投稿された原稿の掲載可否を決定し、その旨を投稿者に通知する。

6. 論文は、投稿された段階で、委員会がそれを公刊し、編集上不可避の変更を行うことを許可したものと見なす。

7. 原稿は、電子メール（電子文書版）と郵便（プリントアウト版）の双方で、下記に送付すること。

Silva Iaponicarum
Uniwersytet im. Adama Mickiewicza
Instytut Orientalistyczny
ul. Międzychodzka 5
60-371 Poznań, Poland
E-mail: silvajp@amu.edu.pl